

博 多 66

— 博多遺跡群第 94 次聖福寺旧塔頭順心庵・第 106 次発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 593 集

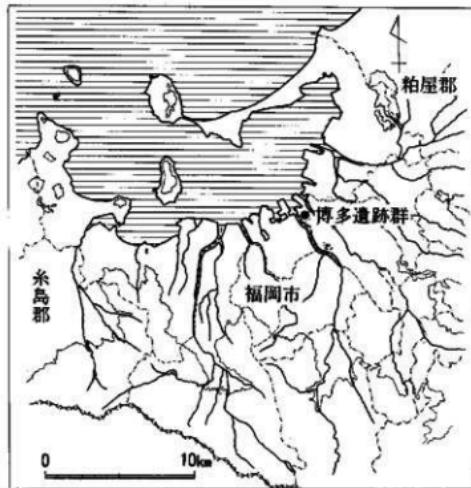
1999

福岡市教育委員会

博 多 66

— 博多遺跡群第 94 次型福寺旧塔頭順心庵・第 106 次発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 593 集

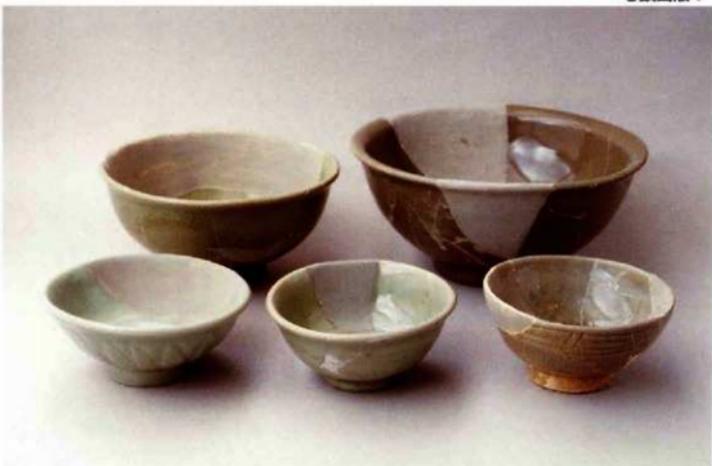


遺跡略号 HKT-94・106
遺跡調査番号 9551・9777

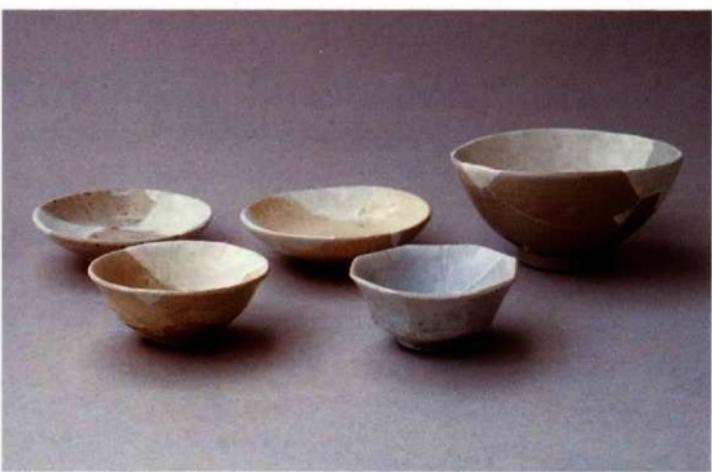
1999

福岡市教育委員会

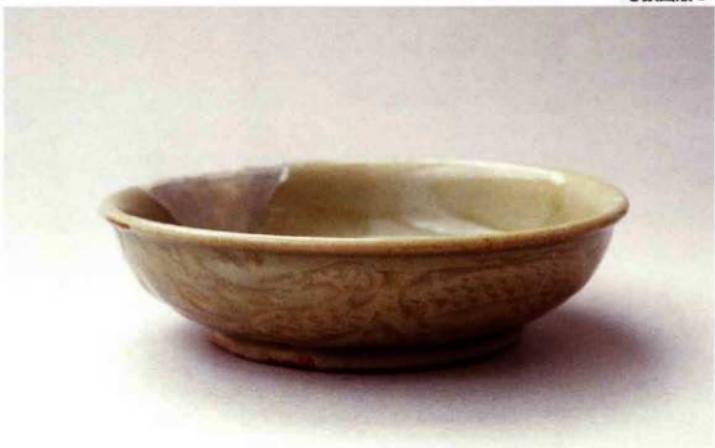
卷頭圖版 1



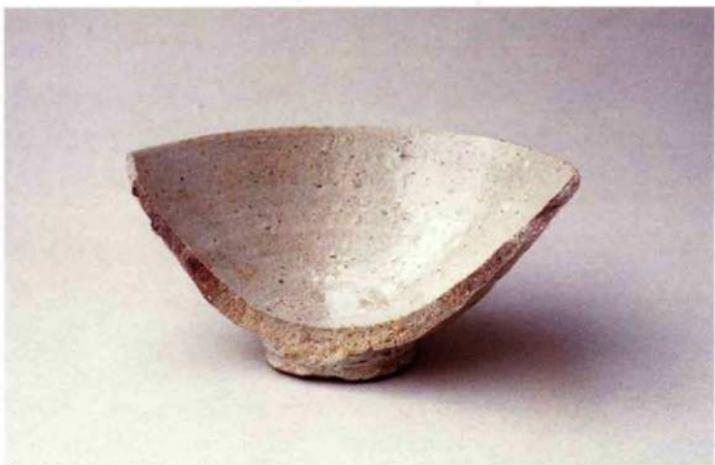
青磁碗（博多遺跡群第 94 次調査 SD 102 出土）



青白磁碗、白磁杯・皿（博多遺跡群第 94 次調査 SD 102 出土）



青磁皿（博多遺跡群第 94 次調査 SD 101 出土）



雜釉陶器碗（博多遺跡群第 94 次調査 SD 101 出土）

序

古くから大陸文化の門戸として栄えた都市遺跡「博多」の発掘調査は近年の都心部の再開発に伴い、現在までに110次を越え、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書は順心寺納骨堂改築に伴って実施された第94次調査他を報告するものです。順心寺、旧順心庵はかつて日本最初の禅宗寺院である聖福寺の塔頭の一つであり、調査では寺域を画していた堀の一部から全国的にも稀少な中国明代前半の陶磁器や主要な建物に葺かれた古瓦類が多く出土しました。さらに下層では弥生時代中期初めの良好な遺物包含層が確認されるなど、枚挙にいとまがないほどの成果を収めています。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでご理解と費用負担などのご協力をいただいた施主の宗教法人順心寺住職安部寛海師、株式会社三共および施工の九州建設株式会社の方々を始めとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　　言

- 本書は納骨堂改築に伴い福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成7(1995)年度から翌平成8(1996)年度にかけて発掘調査を実施した福岡市博多区御供所町11-10所在の博多遺跡群第94次調査、および共同住宅建設に伴い平成8(1996)年度に発掘調査を実施した同じく御供所町5-20所在の第106次調査の報告である。
- 本書に掲載した遺構の実測は第106次調査で一部を古閑真理子、新郷英弘、吉田恵美が行い、他の実測および撮影は担当の福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎があたった。遺物の実測は石器を埋蔵文化財課山口謙治、近世の遺物を古閑、新郷、吉田が行い、他の実測、撮影は佐藤が行った。
- 製図は遺構・近世の遺物を藤村佳公恵、石器を山口朱美、他は佐藤が行った。
- 本書の執筆は石器の項を山口他、編集は佐藤が行った。
- 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

| | | | | | |
|-------|----------------------|------|-------------------|--------|-------------------|
| 調査番号 | 9551 | | 遺跡略号 | HKT-94 | |
| 調査地地籍 | 福岡市博多区御供所町11-10 | | 分布地図番号 | 天神49 | |
| 開発面積 | 367.75m ² | 対象面積 | 390m ² | 調査面積 | 390m ² |
| 調査期間 | 1995(平成7)年2月6日～7月3日 | | | | |

| | | | | | |
|-------|------------------------|------|--------|---------|------------------|
| 調査番号 | 9777 | | 遺跡略号 | HKT-106 | |
| 調査地地籍 | 福岡市博多区御供所町5-20 | | 分布地図番号 | 天神49 | |
| 開発面積 | 355.43m ² | 対象面積 | | 調査面積 | 62m ² |
| 調査期間 | 1998(平成10)年3月13日～3月26日 | | | | |

本文目次

第94次調査

| | |
|--------------|----|
| I.はじめに | |
| 1 調査にいたる経過 | 1 |
| 2 調査の組織 | 1 |
| II. 遺跡の位置と環境 | 4 |
| III. 発掘調査の概要 | 6 |
| IV. 造構と遺物 | 7 |
| 1 検出造構 | 7 |
| 2 出土遺物 | 11 |
| V. 小結 | 35 |

第106次調査

| | |
|-------------|----|
| I.はじめに | |
| 1 調査にいたる経過 | 41 |
| 2 調査の組織 | 43 |
| II. 発掘調査の概要 | 43 |
| III. 造構と遺物 | 43 |
| 1 検出造構 | 43 |
| 2 出土遺物 | 43 |

挿図目次

| | |
|-------------------------------|----|
| 第1図 博多遺跡群発掘調査地域図 | 1 |
| 第2図 博多遺跡群第94次調査地域周辺図(1/1,000) | 3 |
| 第3図 博多遺跡群第94次調査造構配置図(1/100) | 5 |
| 第4図 近世土壇墓実測図 | 8 |
| 第5図 漢土層断面実測図 | 9 |
| 第6図 杖列実測図 | 10 |
| 第7図 近世陶磁器他実測図 | 12 |
| 第8図 銅錢拓影 | 13 |
| 第9図 S D100出土遺物実測図 | 14 |
| 第10図 S D101出土遺物実測図 | 15 |
| 第11図 S D102出土土師器実測図 | 17 |
| 第12図 S D102出土青磁実測図 | 19 |
| 第13図 S D102出土陶磁器実測図 | 20 |
| 第14図 S D102出土瓦質土器実測図 | 21 |
| 第15図 その他の造構・包含層出土遺物 | 22 |
| 第16図 瓦拓影・実測図 | 24 |
| 第17図 S D130出土須恵器実測図 | 25 |
| 第18図 弥生土器実測図(1) | 27 |
| 第19図 弥生土器実測図(2) | 28 |
| 第20図 弥生土器実測図(3) | 29 |

| | | |
|------|-------------------------|----|
| 第21回 | 弥生土器実測図（4） | 30 |
| 第22回 | 石器実測図（1） | 32 |
| 第23回 | 石器実測図（2） | 33 |
| 第24回 | 博多遺跡群第106次調査地域周辺図 | 41 |
| 第25回 | 博多遺跡群第94次調査遺構配置図(1/100) | 42 |
| 第26回 | 土壤実測図 | 42 |
| 第27回 | 博多遺跡群第106次出土遺物実測図 | 43 |

図 版 目 次

I はじめに

1 調査にいたる経過

1995（平成7）年2月27日、宗教法人順心寺から本市に対して博多区御供所町11-10における納骨堂改築工事に伴う埋蔵文化財の事前審査の申請がなされた。申請地は国指定史跡聖福寺境内、旧聖福寺塔頭順心庵、現順心寺の境内地に位置する。

福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、現状変更の許可の後、これを受けて1995（平成7）年5月18日に試掘調査を実施した。旧納骨堂解体前に改築部分の北西にトレーナーを設定した。調査の結果、現地表-1.8m灰褐色砂質土上面で暗褐色の近世の遺構が確認され、さらに-2.1m淡灰色砂上面、-2.4m淡灰色砂（遺物を多く含む。）上面で中世の遺構が確認され、-2.9mでは暗灰色粘土（有機物を含む。）がみられ、さらに下層の-3.1mでは淡黄色砂（地山）となる。

順心寺と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、改築部分の建築面積である申請面積567.75m²の内工事で破壊を受ける全域を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。宗教法人順心寺と福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する受託契約を締結し、調査は同年2月6日から翌1996（平成8）年7月3日まで行われた。

2 調査の組織

調査委託 宗教法人 順心寺

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝（前任） 柳田純孝

第2係長 山口謙治

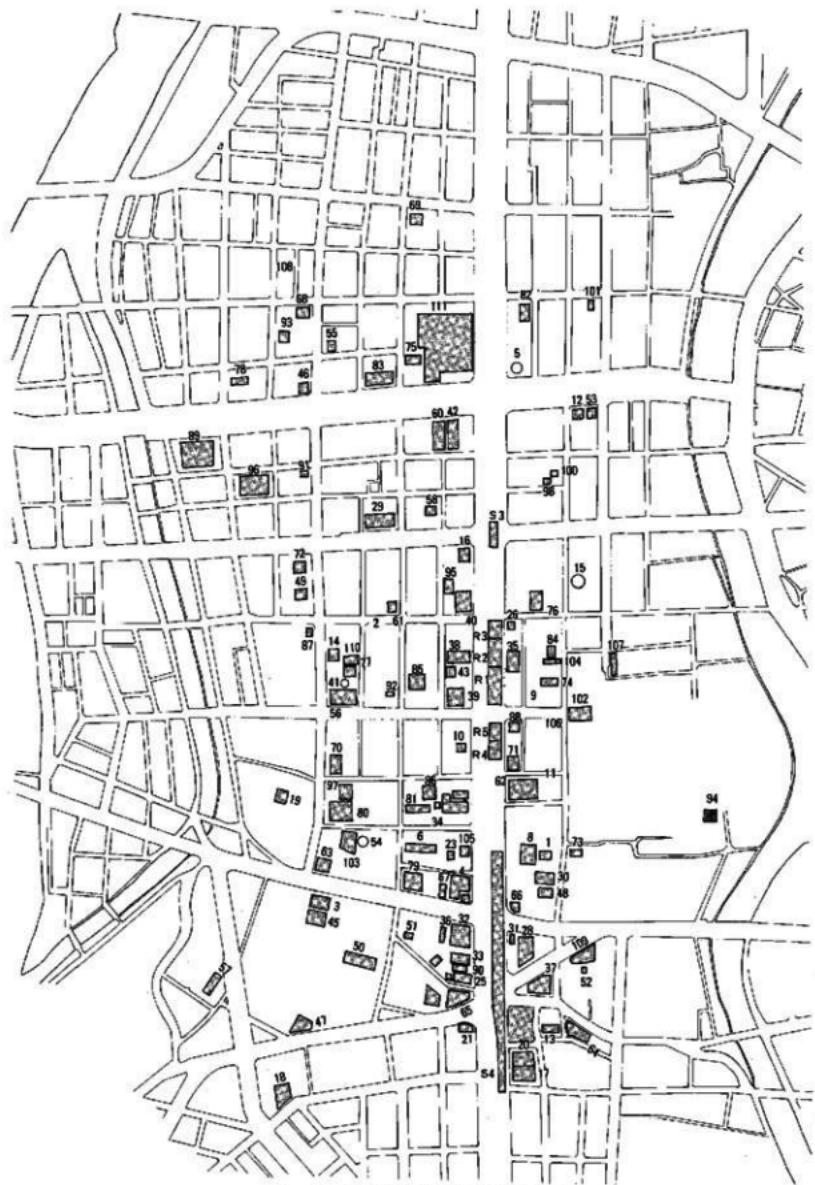
庶務担当 西田結香（前任） 谷口真由美

調査担当 試掘調査 山口謙治 山崎龍雄 池田祐司

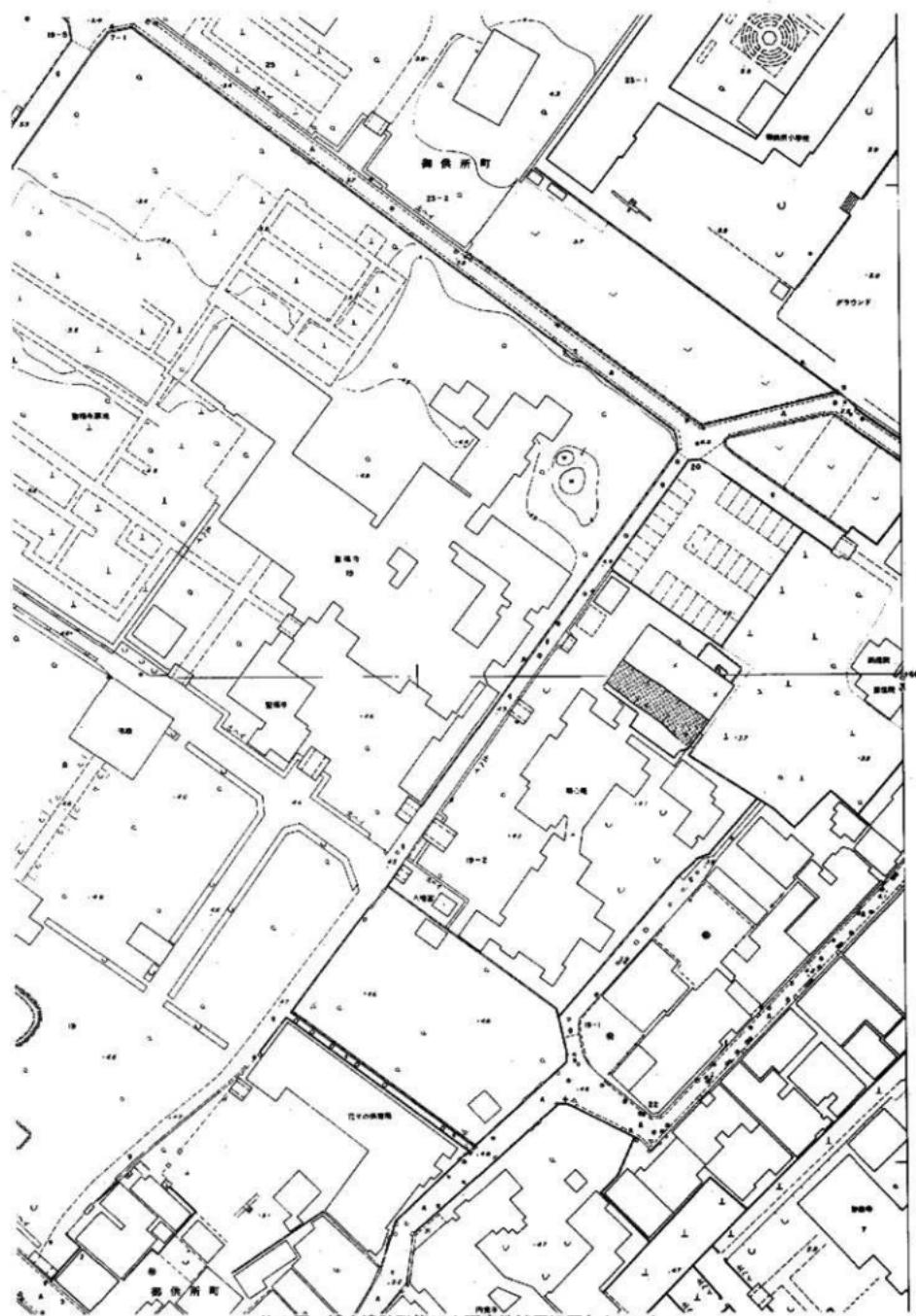
発掘調査 佐藤一郎

発掘調査・資料整理協力者 尾花憲吾・相良謙一・真田弘二・柴田博・柳本伸一・中村米重・森本芳樹・伊藤美伸・尾崎真佐子・河津信子・桑原美津子・古賀美恵子・指山歌子・指山浩子・高橋茂子・為房紋子・播磨博子・福田友子・森野洋子・藤原直子・水野由美子・山口慶子・吉住シヅエ・萬スミヨ・相川和子・江本待子・小原聖子・古閑真理子・近藤順子・齐田紀代美・新郷英弘・千住香織・田中ヤス子・富永勢津子・橋口真弓・藤野邦子・藤村佳公恵・吉田恵美

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について宗教法人順心寺住職安部寛海師、施工の九州建設株式会社の方々をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。



第1図 博多遺跡群発掘調査地域図



第2図 博多連跡群第94次調査地域周辺図(1/1,000)

II 遺跡の位置と環境

博多遺跡群は博多湾岸沿いに連なる古砂丘、那珂川東岸下流域に位置する弥生時代中期から近世にかけての複合遺跡である。その範囲は南北約1.5km、東西800m前後を測る。弥生時代中期から集落が営まれ、中世前半からは対外交渉の拠点としてあまりにも有名な都市遺跡である。中世後半、蒙古襲来以降には鎮西探題が設置され、大宰府に代わる九州の中心となる。その後幾多の戦乱、復興をへて、近世の初めに長崎に国際貿易都市の座を明け渡すまで繁栄を誇っていた。地下鉄建設に伴う発掘調査を嚆矢として、これまでに110次を超える緊急調査が行われ、質、量ともに膨大な資料が蓄積されている。

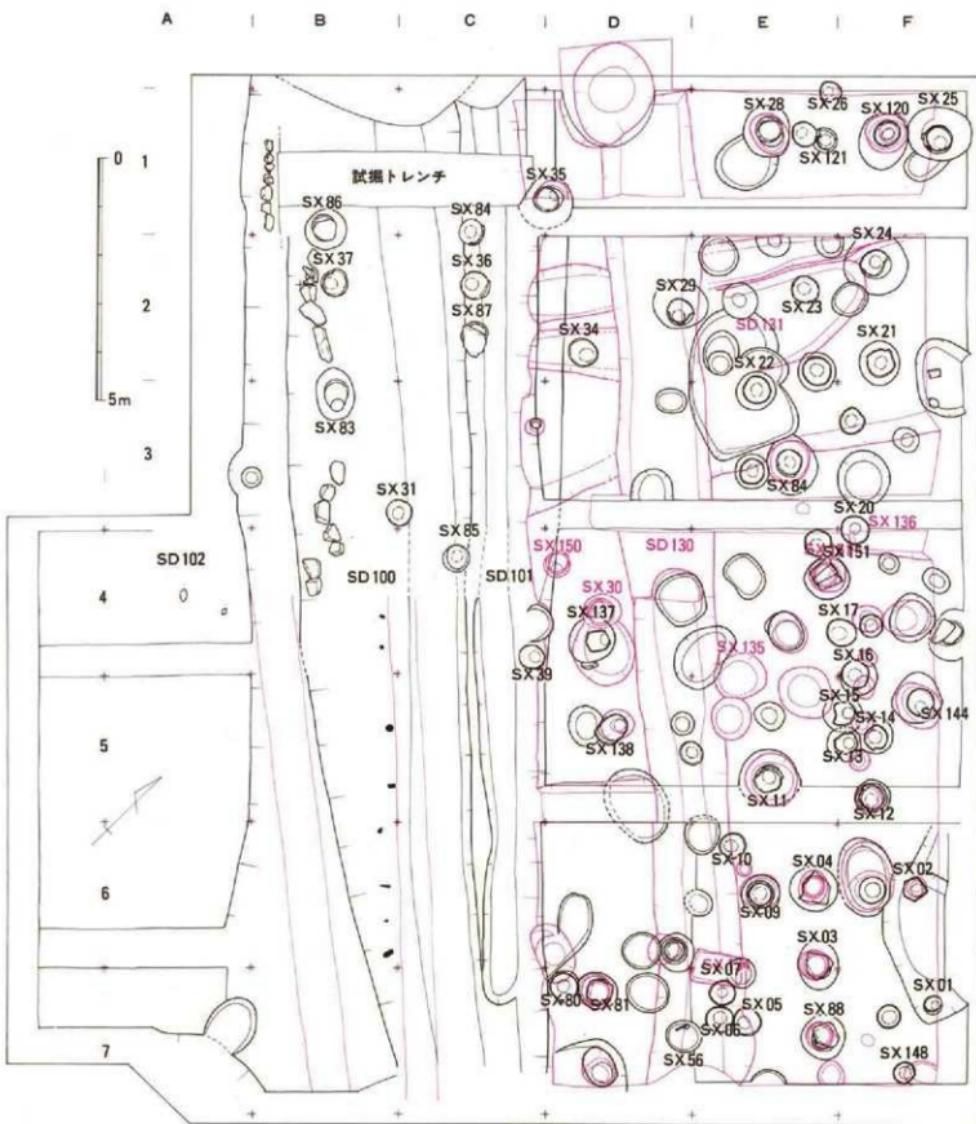
博多湾岸沿いの砂丘上には大小の遺跡が濃密に分布している。博多遺跡群の東側の砂丘上、御笠側東岸下流域には弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡古塚遺跡群が位置する。これまでに10次にわたる調査が行われている。古塚遺跡群の北西には堅粕遺跡群が位置する。これまで10次にわたって調査が行われ、古墳時代前期の方形周溝墓や後期の土塙墓、古代の集落が検出されている。反対側の古塚遺跡群南東は後背湿地となっている。堅粕遺跡群の北側は吉塚本町遺跡が位置する。4次の調査が行われ、弥生時代後期から古代にかけての集落が検出されている。さらに北側には箱崎遺跡群が位置する。これまで13次の調査が行われ、古墳時代前期から中世にかけての集落が検出されている。

博多遺跡群第94次調査区は聖福寺伽藍の北東、旧塔頭順心庵、現順心寺境内北側に位置し、標高4m前後を測る。現在は臨濟宗妙心寺派に属す安國山聖福寺は、1195（建長元）年榮西を開基として宋人百堂跡に創建されたとされる日本最初の禪宗寺院であり、山門には後鳥羽上皇宸筆の「扶桑最初禪窟」の額が掲げられている。1205（元久元）年に伽藍が完工したと伝えられている。その後、妙楽寺の移設や境内の一部が東長寺に編入されるなど寺域は縮小の一途をたどったが、現在も境内にはなお近世以降の再建であるが山門、仏殿、方丈が一直線にそびえ辛うじて1563（永禄6）年に修復された中世の古図にえがかれた伽藍の面影を今にとどめている。塔頭寺院には広福庵、順心庵、節信院、瑞應庵、虚白院、護聖院、幻住庵、円覚寺など法灯を今日に伝えている。境内全城は1969（昭和44）年には国の史跡に指定される。調査区域が位置する順心寺、山順心庵は1356（延文元）年あるいは1361（康安元）年、聖福寺第三十九代住持夢菴顥一による開創とされている。

中世前半から対外交渉の拠点となった博多にあって、聖福寺の僧たちが果たした役割も大きい。明朝の始め、1368（洪武元）年来、洪武帝は朝貢をよびかけ倭寇禁正を要請するために、使節を派遣した。九州にあっては南朝の大宰府征西將軍懷良親王が足利氏と対立していたが、日本国王とみなされた懷良親王は1371（洪武4、応安4）年に答礼の使者を派遣した。これを受けて、日本側使者の遣団に際し使節を遣わし冊封体制下に組み入れることとした。しかし、九州では南朝方は一層形勢が悪化しており、大宰府は九州探題今川了俊の下にあった。明使は直前に博多を奪取した今川了俊に拘留され、二年の間聖福寺に留め置かれている。

日本国王が明皇帝に朝貢する形式をとった日明貿易は1404（永樂2、応永11）年以降は明から支給された勘合符を携帯する勘合船に制限された。聖福寺第百五代住持順賢顥一は1539（天文8）年大内義隆を命を受け勘合船の正使として活躍した。その二号船には順心庵仁叔恕上司が乗船していた。

初期の段階では、中国の典籍に通じた禪僧の会得した語学力、文章作成術、儒教的教養を高く評価しての重用である。外交文書の起草や外交使節の任務など外交プレーン、あるいは直接実務を遂行するものとして、禪僧たちが果たした役割は大きかった。遣明船貿易が軌道にのった応永年間



第3図 博多遺跡群第94次調査造構配置図(1/100)

(1394～1428年)以降となると、釋僧の外交業務は手なれたルーティン・ワークとなり、僧衣をまとった貿易商人と化すようである。

参考文献

- 川添昭二編「よみがえる中世 I 東アジアの国際都市」1988平凡社
- 川添昭二「中世九州の政治と文化」1981文献出版
- 川添昭二「対外関係の史的展開」1996文献出版
- 武野要子「特異宗派」1998西日本新聞社
- 田中健夫編「大明國と倭寇」1986ぎょうせい
- 村井章介「アジアの中世日本」1988桜倉書房
- 聖福寺「聖福寺通史」1995

III 発掘調査の概要

博多遺跡群第94次調査区は聖福寺伽藍の北東、旧塔頭順心庵、現順心寺境内北側に位置し、標高4m前後を測る。現況は墓地改葬、納骨堂解体後さら地となっていた。調査は5月26日にバックホーによる表土掘取りから開始し、表土は外部に搬出し排土は境内の調査対象区域外で処理することとした。

表土掘取り後、2月6日から作業員を投入して現地表下2m前後のレベルで造構の検出にあたった。墓地改葬、旧納骨堂建設の際の廃棄土壤の他、改葬を免れた近世墓を検出した。埋葬施設は棺桶裏の他、木質部は残存していないかったが木桶、木棺によるものがみられた。合計60基検出された。

包含層上面での搅乱掘り下げや造構面掘削の際、調査区の南西部で集中して遺物がみられ、北西部の試掘トレンチでは現地表下2.9mで有機物を含んだ暗灰色粘土が確認されており、池や溝といったかって水を湛えた造構の存在が予想された。現況の伽藍に沿ったグリットに合わせサブトレンチを入れ、造構の堆積、切り合いの状況をおさえ、平面形を把握した上で、順次造構の検出にあたった。その結果、15世紀から16世紀にかけての時期を越えた4条の溝がほぼ同一の方向に延びていることが判明した。最初に検出した溝SD100が最も新しく、以下SD101・102→SD103の順に古くなる。途中4月1カ月間、調査担当者の地域文化フォーラム事業による中国出張のために施主の同意の上、調査が中断されたが、包含層（I層）掘り下げ後、さらに7世紀の溝状造構、弥生時代中期初頭の遺物包含層（II層、やや粘性をもつ淡黄色粗砂）を検出した。調査は7月6日に発掘機材の撤収をもって終了した。埋め戻しは施工業者によった。

IV 遺構と遺物

1 検出遺構

西偏45°に主軸方位をとる現況の伽藍に沿って3m四方のグリットを設定した(第3図 遺構配置図参照)。南西から北東方向にかけてはアルファベットABC…を、直交する北西から南東方向にかけてはアラビア数字を1から記し、アルファベットアラビア数字の表記によりグリットを示す。

近世墓 表土掘取り後、現地表下2mで遺構の検出にあたったが、墓地改葬、旧納骨堂建設の際の廃棄土壠の他、改葬を免れた近世墓を検出した。埋葬施設は棺桶甕の他、木質部は残存していなかったが木桶、木棺によるものがみられた。合計60基検出された。旧納骨堂の北東に墓地改葬後、墓碑が集積され塚とされていたが、それらの中には享保年間の年号を刻んだもののが多々見受けられた。棺桶甕に用いられた肥前系人甕や供献された肥前系磁器等の特徴から、近世墓の多くは18世紀に营造されたものであり、塚に集積された墓碑の多くは今回の調査で検出された近世墓の上部に据え置かれたものであろう。

土壙墓(第4図、図版3) 棺桶の残欠とみられる木質、鉄釘等が検出されなかったことから、土壙墓として報告する。鉄釘を用いない木製棺による木棺墓の可能性もある。

SX134 E-6・7でI層下で、SD130溝を掘り下げる際に検出した。平面形は長方形を呈し、全長2.0m、幅65cm、深さ0.5mを測る。墓壙の主軸の方位を東偏55°に取る。壁はほとんど直に立ち上がる。墓壙の北東で土師器小皿1が底面から5cm浮いた状態で、西側で銅錢6枚が重なった状態で底面に接して出土した。

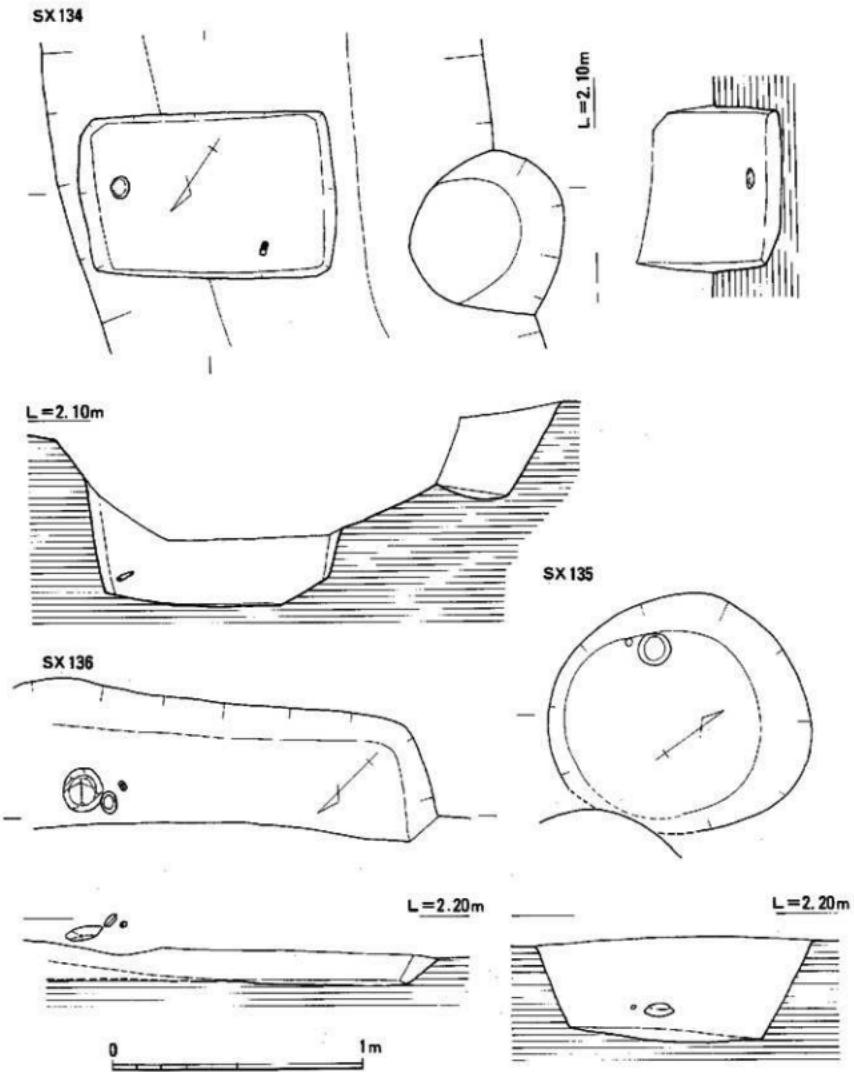
SX135 E-4・5でI層下で検出した。平面形は略円形を呈し、上面径1.0m、深さ0.4mを測る。壁は斜めに立ち上がる。SX135を切る。墓壙の西側で土師器杯1、銅錢が底面から10cm浮いた状態で出土した。

SX136 F-3・4でI層下で検出した。墓壙の北東は壁面にかかり調査区外に延び、北西はトレチによって破壊を受けている。平面形は隅丸方形を呈し、全長1.7m以上、幅60cm以上、深さ15cmを測る。墓壙の主軸の方位を東偏45°に取る。を測る。壁は斜めに立ち上がる。墓壙の北東で土師器小皿1・杯1、重なった銅錢6枚が、底面から20cm浮いた状態で出土した。

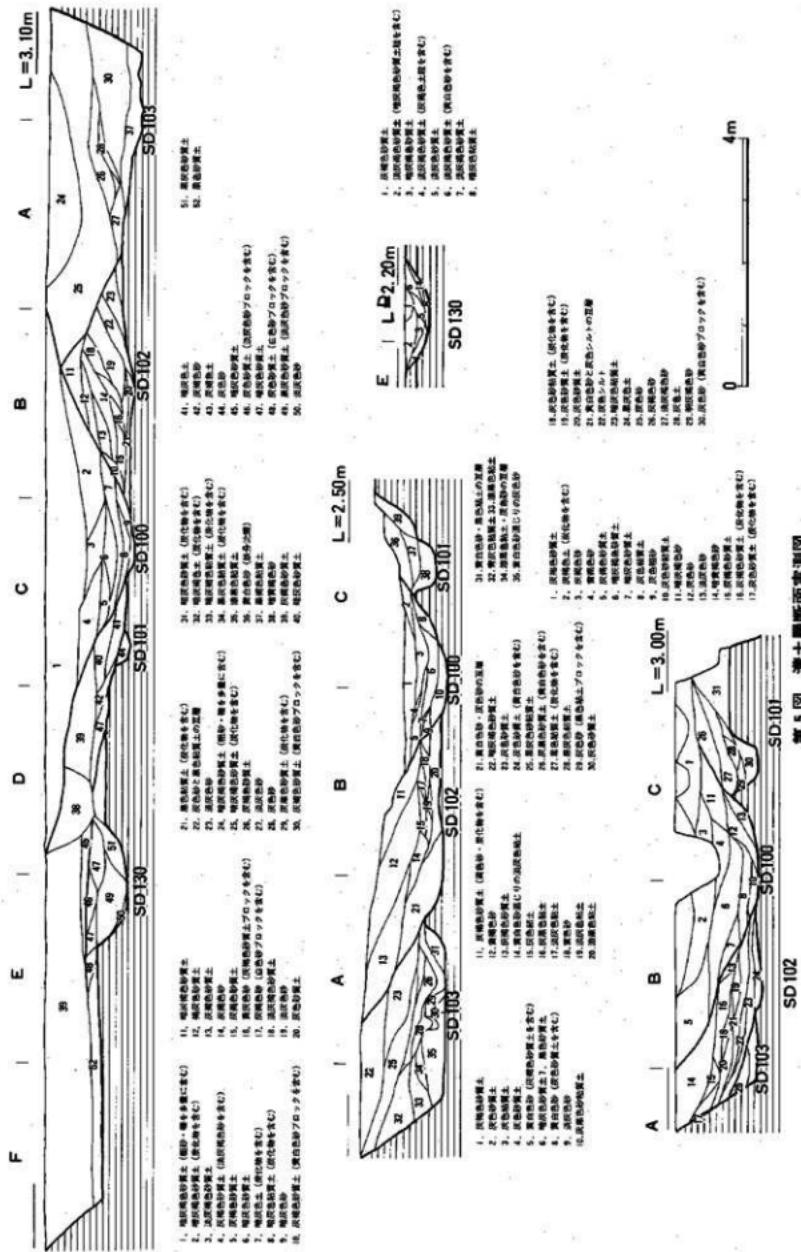
甕棺墓 棺桶甕を埋葬施設とする甕棺の中、改葬を免れた53基を検出した。内40基は甕底部のみの残存である。甕の口縁部まで残存していたものは13基で、その内SX03・04・86~88・151・152は石蓋まで残存していた。SX83は倒置棺であった。改葬後の甕棺墓の墓壙とみられる円形の土壠も30基余り検出した。それらの中にはSX135のように、土壙墓、あるいは木桶を棺として用いたが、木質も留めない程度に腐朽した木棺墓も含まれよう。

棺桶甕 内部には肥前系磁器、六道鏡、煙管を供獻するものが多々みられた。主要な遺物については出土遺物の項で報告する。一部には人骨が残存するものがあり、九州大学中橋孝博先生には人骨取り上げにあたって多大な労をおかけしたにもかかわらず、諸般の事情でその際の所見等を今回の報告で掲載することが出来なかつた。棺桶甕個別の写真撮影、実測を含めて、その報告を先送りする次第となつたことは、担当者の不明、怠慢によるものである。

溝(第5図、図版4~8) 包含層上面での搅乱掘り下げや遺構面掘削の際、調査区の南西部で集中して遺物がみられ、北西部の試掘トレチでは現地表下2.9mで有機物を含んだ暗灰色粘土が確認さ



第4図 近世土壤墓実測図





第6図 杭列実測図

れており、池や溝等からて水を湛えた造構の存在が予想された。グリットに合わせサブトレーナーを入れ、造構の堆積、切り合いの状況をおさえ、平面形を把握した上で、順次造構の検出にあたった。その結果、15世紀から16世紀にかけての時期を越えた4条の溝が西偏45°に主軸方位をとる現況の御塙の主軸に沿ってほぼ同一の方向に延びていることが判明した。最初に検出した溝SD100が最も新しく、以降SD101・102→SD103の順に古くなる。さらに近世墓が掘り込まれている包含層掘り下げの後、D-E-1~7でSD100~103と平行する溝SD130を検出した。SD100~103・130は北西から南東方向に走る。発掘区域内で延長22m検出した限りでは底面の傾斜はほとんどみられなかった。さらにD-F-2~3で7世紀代の溝状造構SD131を検出した。

SD100 B-C-1~7で検出した。SD101・102を切っている。切り合っている溝の中では最も時期が下る。幅4.4~6.2m、深さは1.2~1.4mを測る。

SD101 C-D-1~7で検出した。SD100に切られている。切り合っている溝の中で規模が最も小さく、寺域から遠ざかっている。幅1.8m以上、深さは0.8~1.0mを測る。

SD102 A-B-1~7で検出した。SD100に切られ、SD103を切っている。切り合っている溝の中で最大の規模をとる。幅6.0m以上、深さは1.1~1.4mを測る。

SD103 A-1~7で検出した。SD102に切られている。溝の南西は壁面にかかり、発掘区域外に延びる。切り合っている溝の中で、最も寺域寄りである。幅3.8m以上、深さは1.3~1.5mを測る。

SD130 D-E-1~7で検出した。検出した溝の中で規模が最も寺域から遠ざかっている。幅1.8~2.3m、深さは0.4~0.7mを測る。

これらの溝は、1563(永禄6)年に修復された中世の聖福寺古図に描かれた寺域の三方を画する堀の一部と考えている。B-1~4で全長20~30cm、幅20cm前後の直方体の石材からなる列石が走っている。B-1の列石は面が揃っているがB-2以下の列石のそれは不揃いである。聖福寺古図にある御塙より東の堀の内側には土壘状の高まりがえがかれており、これらの列石は土壘の根留め石が崩れ落ちたもので、B-1の列石は崩落の度合いが少なく、面の乱れを最小に留められたのであろうか。

杭列(第6図、図版7)列石が途切れるB-4~6で検出した。8本の木杭からなる。1m前後の間隔をとって、SD100の下端に沿って打ち込まれている。1ヶ所間隔が広くなっているが、その両端の木杭のみ木質の残存は不良であり、間の木杭が腐朽し失われたのであろう。杭先端のレベルは揃っており、標高0.8mを測る。護岸のために打ち込まれ、列石とも一連のものであろうか。

2 出土遺物

近世陶磁器（第7図）

SX12出土遺物

伊万里染付碗（1） 口径10.8cm、器高6.0cm、高台径4.5cmを測る。

無釉陶器急須（2） 口径7.6cm、器高8.0cm、底径6.8cmを測る。

SX14出土遺物

伊万里染付水滴（3） 口径1.8cm、器高8.0cm（蓋を含む）、底径4.4cmを測る。

伊万里染付合子蓋（4） 口径4.8cm、器高1.4cmを測る。

伊万里染付合子身（5） 口径5.6cm、器高2.0cm、底径5.0cmを測る。

SX18出土遺物

伊万里染付合子身（6） 口径5.9cm、器高2.3cm、底径4.3cmを測る。

SX22出土遺物

伊万里染付皿（7） 口径10.7cm、器高2.8cm、高台径6.8cmを測る。

伊万里染付碗（8） 口径9.4cm、器高5.0cm、高台径5.2cmを測る。

SX25出土遺物

伊万里染付皿（9） 口径10.0cm、器高2.4cm、高台径6.0cmを測る。

SX56出土遺物

伊万里染付碗（11） 口径11.2cm、器高6.0cm、高台径5.5cmを測る。

SX80出土遺物

伊万里染付碗（12） 口径10.5cm、器高5.3cm、高台径4.0cmを測る。

SX134出土遺物

土師器小皿（13） 底部回転糸切離し、内底まで回転横ナデ、口径8.4cm、器高1.3cm、底径6.0cmを測る。

SX135出土遺物

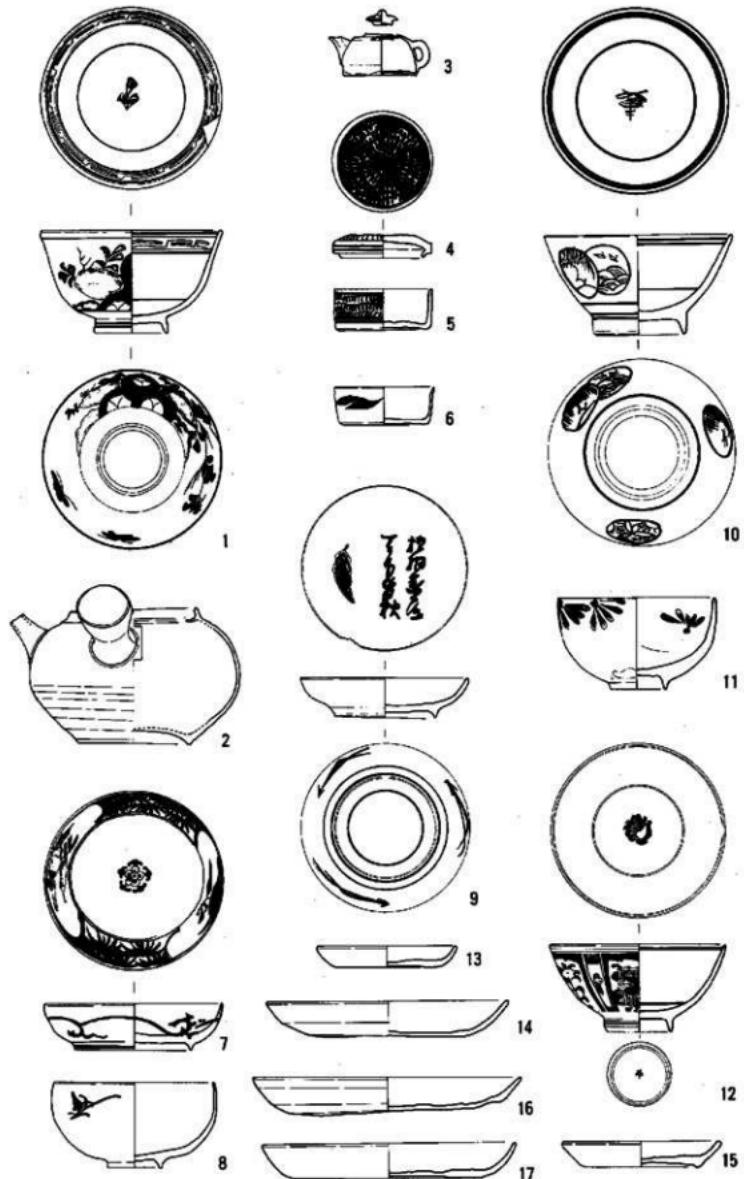
土師器杯（14） 底部静止糸切離し、内底ナデ、口径14.4cm、器高2.2cm、底径9.2cmを測る。

SX136出土遺物

土師器小皿（15） 底部回転糸切離し、内底まで回転横ナデ、口径9.4cm、器高1.5cm、底径7.1cmを測る。

土師器杯（16・17） 底部静止糸切離し、内底ナデ、口径15.1～16.0cm、器高2.1～2.6cm、底径10.6～11.8cmを測る。

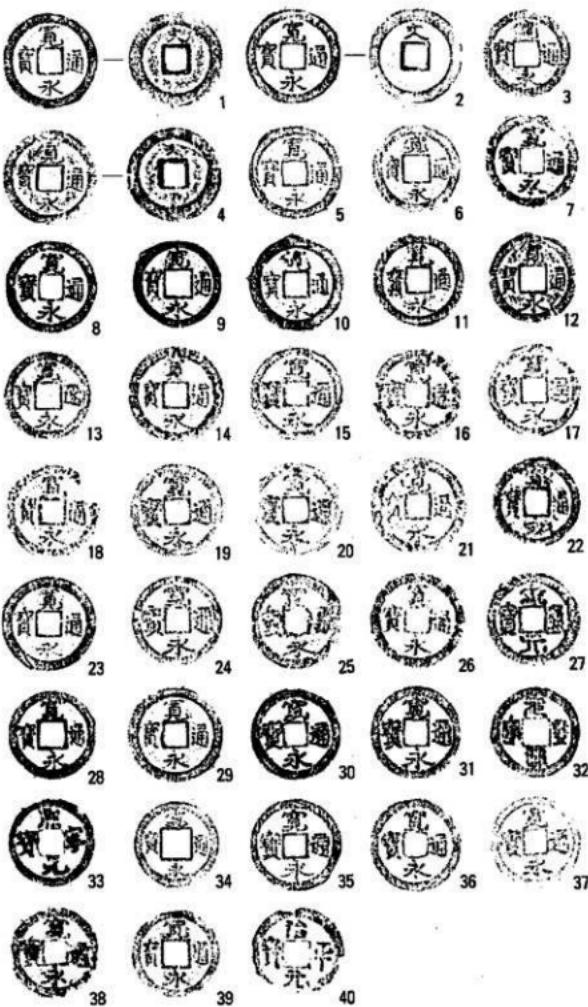
銭貨（第8図） 近世墓からは「六道銭」、その名のとおり6点の銭を副葬するものが20基みられた。すべて銅製の寛永通寶である。SD100上面や包含層掘り下げの際にも寛永通寶が混入して出土した。その中の残存状態が良好なもの拓影を図示する。渡来銭はSD100・103から出土した。SD100からは27の宋通元寶（960年初鋤）、SD103からは32の元豊通寶（1078年初鋤）、33の熙寧元寶（1068年初鋤）、他に試掘トレンチから治平元寶（1064年初鋤）が出土した。1・2がSX17、3～6がSX56、7～12がSX57、13がSX62、14・15がSX63、15～17がSX81、18・19がSX84、20がSX86、21がSX88、22がSX92、23がSX112、24がSX134、25がSX151、27～31がSD100 I層、32・33がSD103、34～38がI層、39が搅乱、40が試掘トレンチからの出土である。



第7図 近世陶磁器他実測図

0

20cm



第8図 銅錢拓影

SD100出土遺物（第9図、図版11）図示した他、粉青沙器、瀬戸卸皿片が出土（図版15）。

土師器 小皿（1・2） 底部は回転糸切離しによる。いずれも口縁部に煤が付着しており、灯火器として使用されたのであろう。1は内底をナデ、外底に板状圧痕が残り、口径6.1cm、器高1.7cm、底径4.2cmを測る。2は内底まで回転横ナデ、口径6.2cm、器高1.6cm、底径4.3cmを測る。

青磁 香炉（3） 口縁部、三足の内1個が欠失し、灰白色の胎土に灰オリーブ色の釉が底部輪まで施される。底径3.2cmを測る。

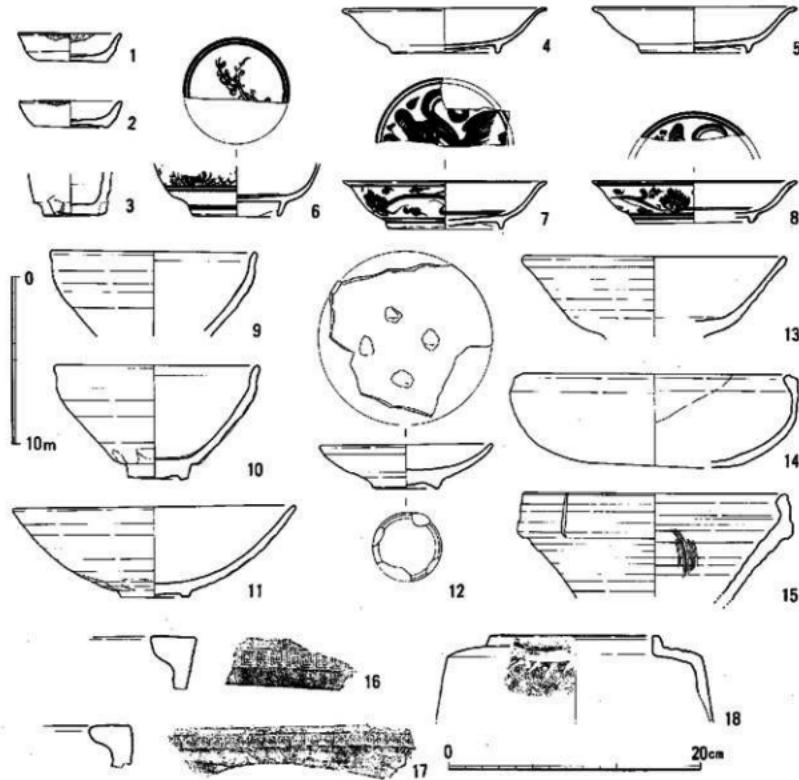
白磁 皿（4・5） 青花皿B群と同じ器形、端反り口縁の高台付皿である。口径12.2cm、器高2.7cm、高台径6.2～6.3cmを測る。

青花

碗（6） 口縁部欠失のB群で、高台は薄く、内傾している。外面は体部に風景、腰部に界線、内底見込みは二重の界線内に梅文を描く。

皿（7・8） 白磁皿4・5と同じ器形のB群、口縁端反りの高台付皿である、外面は口縁部、腰部に界線をめぐらせ、体部に牡丹唐草、内底見込みは二重の界線をめぐらせ、玉取獅子を配す。

黒釉陶器 碗（9・10・11） 9・10は口縁部下をわずかにくばめた束口の碗で、口縁部はほぼ垂



第9図 SD100出土遺物実測図

直に立ち上がり、端部は外に開く。底部欠火の9はにぶい橙～明褐色の粗い胎土に黒褐色の釉が掛けられている。10の高台の内刺りは浅く、豊付は斜めに削られ内縁を接地面とする。高台脇を水平に削り体部との境は鋭く稜をなす。灰白色の粗い胎土にオリーブ黒色の釉が高台脇まで掛けられている。口径12.3cm、器高6.8cm、高台径3.6cmを測る。11は浅い鉢形の碗で、体部は丸みを持って立ち上がる。高台は低く断面台形に削り出される。灰白色の粗い胎土に黒褐色の釉が高台脇まで掛けられている。口径17.0cm、器高5.4cm、高台径4.2cmを測る。いずれも瀬戸・美濃系とみられる。

雄軸陶器 朝鮮王朝陶磁器である。

碗 (12) 底部欠火の器周3/8残存の碗の破片資料である。平坦な内底見込みには目痕が残り、体部は直線的に外上方に延びる。灰色微粒子を含んだ灰白色の胎土にやや緑色を帯びた灰白色の釉が掛けられ、器表には細かい貫入が入っている。

皿 (13) わずかに丸みをもった高台付皿で、高台の削り出しは粗雑である。緑灰色の胎土に透明釉が掛けられ、貫入が著しい。高台、内底見込みに4ヶ所目痕が残る。復元口径10.4cm、器高2.6cm、高台径3.9cmを測る。

陶器

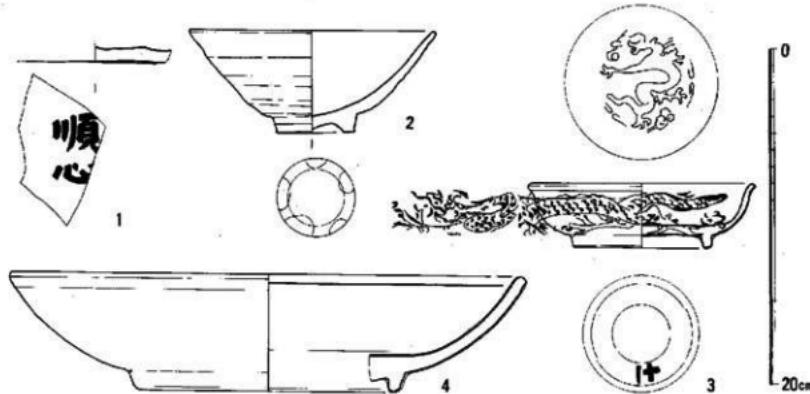
鉢 (14) 内湾する体部にやや肥厚する口縁部がつく平底の鉢である。平坦にされた口縁端部は外傾し内側にやや拡張する。明褐色の胎土に褐色の釉が掛けられているが、むらが多く低火度による焼成のため全く光沢はみられない。口径16.8cm、器高5.5cm、底径9.2cmを測る。

摺鉢 (15) 備前焼V期の摺鉢である。器周1/4残存の口縁部からの復元口径20.5cmを測る。口縁部はN字状をなし、外面には回線をめぐらせる。内面には6本単位の筋目があり、灰褐色に焼成されている。

瓦質土器

鉢 (16・17) 口縁部を内へ折り曲げ、上面を平らにする。16は体部がやや外傾しながら直に近く立つ方形の鉢とみられ、口縁部下外面に雷文をスタンプする。17は体部上位を内湾させ、口縁部下外面に二直連文をスタンプする。

湯蓋 (18) 頸部は短く、肩部には明瞭に稜がつき、その上位に印文で雲文、如意頭文をめぐらす。



第10図 SD101出土遺物実測図

SD101出土遺物（第10図、図版11）

陶器（1） 赤褐色に焼成された備前焼の底部片で、内底の横ナデ痕が顯著に残り、ほとんど磨滅しておらず、器種は壺あるいは甕であろう。外底に「順心」の墨書が記されているが、聖福寺塔頭順心庵を指すものであろう。

雜釉陶器

碗（2） 朝鮮王朝陶磁器である。粗雑に削り出された高台から体部は直線的に開く。

器周1/2残存の復元口径14.8cm、器高6.1cm、底径4.8cmを測る。高台、内底見込みに目痕が残る、完存する高台には5ヶ所みられる。白色微粒子を含み、細かい隙間がみられる灰白色（2.5Y 7/1）の粗い胎土に灰白色（10Y 7/1）の釉が施され、高台脇から高台にかけてカイラギ状を呈する。茶陶で「青井戸」と称されるものであろう。

青磁

皿（3） 内湾する体部に外反する口縁部がつく高台付の皿である。外底の釉を輪状にカキ取り露胎としている。体部外面に竜を2頭片切彫りし、内底見込みにも竜の印文を配する。外底の露胎部分に朱書が記されている。「十一」あるいは「什」と判読されようか。口縁部のわずか1/8を欠失し、口径13.8cm、器高3.9cm、高台径8.5cmを測る。灰白色的胎土にオリーブ灰色の釉が施されている。

盤（4） 底部の高台より内側を欠失し、器周1/6残存の復元口径30.8cm、器高7.0cm、復元高台径16.0cmを測る。内面の口縁部下、体部と底部の境付近に沈線をめぐらせ、残存する範囲では無文である。浅黄橙～灰白色的胎土にオリーブ灰色の釉が施され、質入が著しい。

SD102出土遺物（第11～14図、図版12～15） 図示した他、青花頭部片（蕉葉文）が出土している。

土師器 底部は回転糸切離しによる。

小皿（1～12） 1・3・10の口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使用されたのである。器高はやや高く、口径に比べ底径は小さい。口径5.9～7.6cm、器高1.3～2.0cm、底径4.0～5.9cmを測る。1～6・8～11は内底まで回転横ナデ、7・12は内底をナデ、外底に板状圧痕が残る。

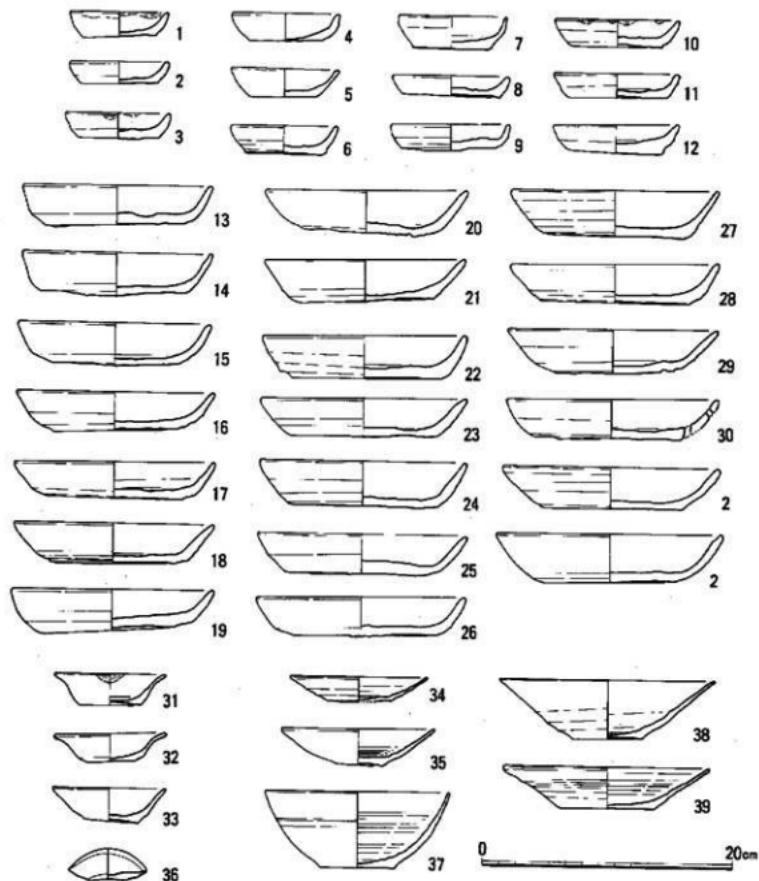
杯（13～30） 口径11.5～12.9cm、器高2.2～2.7cm、底径7.4～9.4cmを測る。15～25・27～30は内底まで回転横ナデ、13・14・26は内底をナデ、外底に板状圧痕が残る。30は口縁部下、底部脇のそれぞれ対称な位置に穿孔されている。

大内系土師器 以下、精良な胎土を用い器壁が薄く端部が鋭く仕上げられた灰白～浅黄橙色を呈する一群である。さらに口径に比べ底径の割合を減じている。定義が今一つ曖昧であるが、大内系と称されている。

小皿（31～35） 内底まで回転横ナデ、口径の大きさから31～33と34・35に大別される。端反りの31・32に対し、33は直線的に開く。31は完形で、口縁部に褐色の付着物がみられる。32は口縁端部に煤が付着している。口径6.7～6.8cm、器高1.7～2.0cm、底径2.9～3.8cmを測る。34・35の内面にはロクロ目が残り、強い稜をなしている。34の体部は直線的に開き、口径8.2cm、器高1.6cm、底径3.8cmを測る。器表に煤が付着している。35の体部は丸みを持っており、口径9.2cm、器高2.2cm、底径2.8cmを測る。外面にイネ科植物纖維の圧痕がみられる。

耳皿（36） 内底まで回転横ナデの小皿の口縁部を両側から丸く押し曲げ耳皿としている。完形品で、最大口径4.7cm、器高1.9cm、底径2.4cmを測る。

杯（37～39） 内外面ともロクロ目が顯著に残り、鋭く稜をなしている。37は内底まで回転横ナデ、復元口径11.0cm、器高4.5cm、底径4.4cmを測る深めの杯である。38は内底まで回転横ナデ、完形品で、口径13.0cm、器高3.6cm、底径4.4cmを測る。39は内底をナデ、外底に板状圧痕が残る。口径12.5



第11図 SD102出土土器実測図

cm、器高2.5cm、底径4.8cmを測る浅めの杯である。

青磁 碗 の法量は大中小と多様である。

碗 (40~51) 40~45は内湾しながらのびる体部から外反する口縁部がつき、端部は丸くおさめられる。いずれも厚く施釉されている。41~43は全面に施釉の後、外底の釉を輪状にカキ取り露胎としている。40・41は灰白色の胎土に灰オリーブ色を呈する種が施され、貫入が著しい。40の器周1/4残存の復元口径18.0cmを測る。41は内底見込みに花文をスタンプする。口径15.8cm、器高8.7cm、高台径6.8cmを測る。42は内面に浮文からなるラマ式蓮弁、その間に牡丹・蓮華・菊花文を型押ししている。口縁部の3/4を欠失し、復元口径16.8cm、器高8.5cm、高台径6.8cmを測る。灰白色の胎土に灰オリーブ

ア色の釉が施され、貢入が著しい。43は口径21.9cm、器高10.2cm、高台径9.2cmを測る大振りの碗で、体部内外面に蓮華折枝文、内底に花文を範彫りし、外底の輪状カキ取りの露胎部分には判読不明の範刻がみられる。灰白色の胎土に灰オリーブ色の釉が施され、貢入が著しい。44は高台の外側まで施釉され、外底の疊付より内側は露胎となっている。内底見込みに菊花文をスタンプし、外底の露胎部分に「十」の墨書が記されている。口径11.7cm、器高5.8cm、高台径5.2cmを測る。灰白色的胎土にオリーブ灰色の釉が施されている。45は高台内側の途中まで施釉され、内底見込みの釉はカキ取られ露胎とし花文がスタンプされている。口縁部の3/4を欠失し、復元口径13.5cm、器高6.7cm、高台径5.6cmを測る。灰白色的胎土に灰オリーブ色の釉が施され、貢入が著しい。

46・47は外面口縁部下に片切り彫りによる雷文帯をめぐらせる。46は器周1/8残存の復元口径23.0cmを測る大振りの碗で、外面は口縁部下に雷文帯、体部に簡略化したラマ式蓮弁、内面には蓮華折枝文を片切り彫りしている。灰白色的胎土にオリーブ灰色の釉が施されている。47は高台内側の途中まで施釉され、外面口縁部下に片切り彫りによる雷文帯、内底見込みにはスタンプによる鶴磨文を配する。外底の露胎部分に「道□」の墨書が記されている。口径11.8cm、器高6.1cm、高台径5.5cmを測る。灰白色的胎土にオリーブ灰色の釉が施され、貢入が著しい。

48は体部外面に蓮弁を削り出す。高台外側まで施釉され外底の疊付より内側は露胎で、内底見込みも釉がカキ取られ露胎となっている。口径13.0cm、器高5.7cm、高台径5.2cmを測る。灰白色的胎土に明オリーブ灰色の釉が掛けられている。

49は高台内側の途中まで施釉され、内底見込みに沈圓線をめぐらせ花文をスタンプし、外底の露胎部分には「巖」の墨書が記されている。灰白色的胎土にオリーブ灰色の釉が施されている。50・51は骨付まで施釉され、灰色の胎土にオリーブ灰色の釉が施されている。50の内底見込みには印花文が施されている。51の外底の露胎部分に「説□」の墨書が記されている。

皿(52) 内湾する体部に外反する口縁部がつく高台付の皿で、高台内側の途中まで施釉され、内底見込みに菊花文がスタンプされている。器周1/6残存の復元口径13.0cm、器高3.4cm、高台径7.6cmを測る。灰白色的胎土にオリーブ灰色の釉が施されている。

高足杯(53) 内湾気味に直立の体部に外反する口縁部の杯部で、器周1/3残存の復元口径6.6cmを測る。灰白色的胎土にオリーブ灰色の釉が施されている。

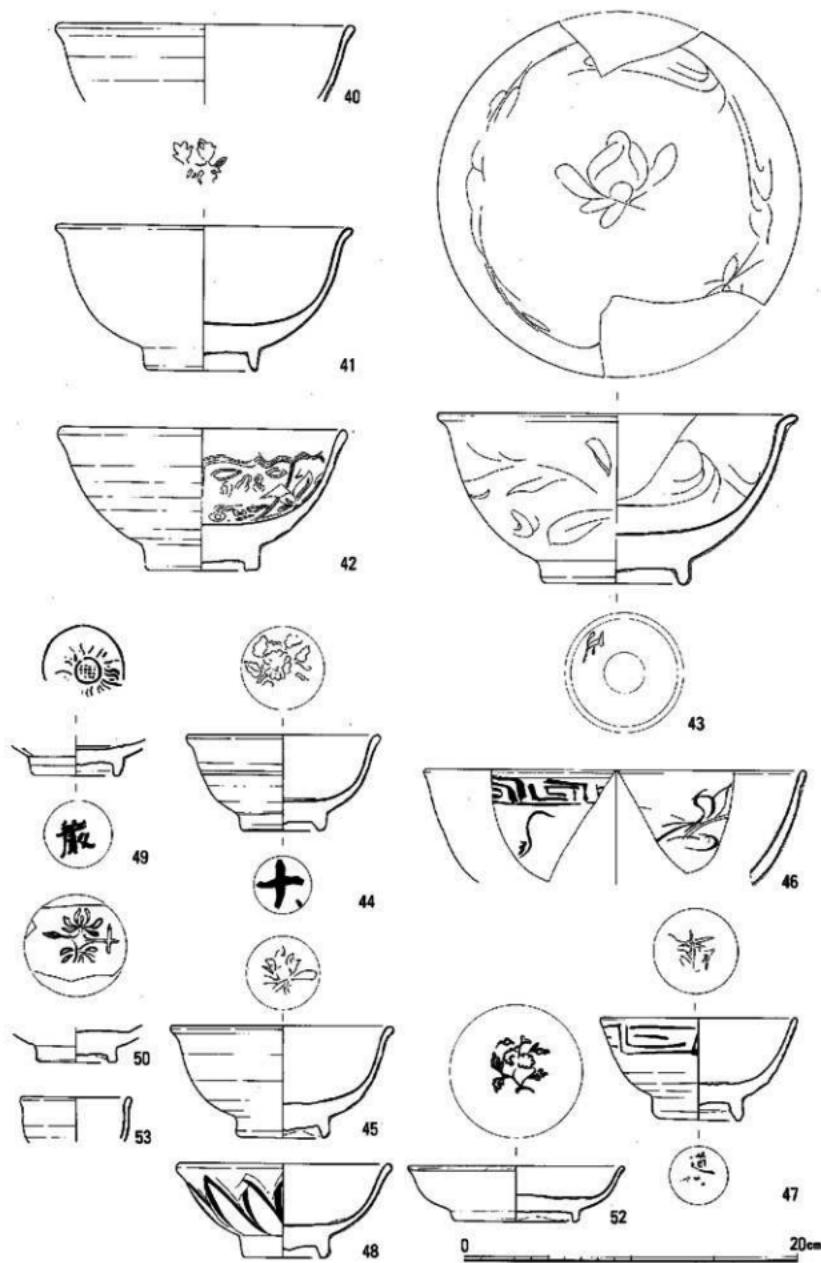
白磁 灰白色的胎土に無色透明の釉が掛けられている。

杯(54~57) 54は高台外側まで施釉され外底の疊付より内側は露胎で、55~57の体部外面下半は露胎である。54~55は小型の多角杯で、54の外底には「十□」の墨書が記されている。口縁部の1/8を欠失し、口径7.4cm、器高3.5cm、高台径3.1cmを測る。55の高台には4ヶ所弧状の抉り込みが入っている。器周1/4残存の復元口径7.2cm、器高3.6cm、復元高台径3.1cmを測る。56は内湾する体部から外反する口縁部がのび、高台は3ヶ所弧状の抉り込みが入っている。口縁部の1/3を欠失し、口径7.8cm、器高3.4cm、高台径3.2cmを測る。57は体部に加え口縁部も内湾する。器周1/4残存の復元口径8.1cm、器高3.1cm、器周3/4残存の高台径3.8cmを測る。

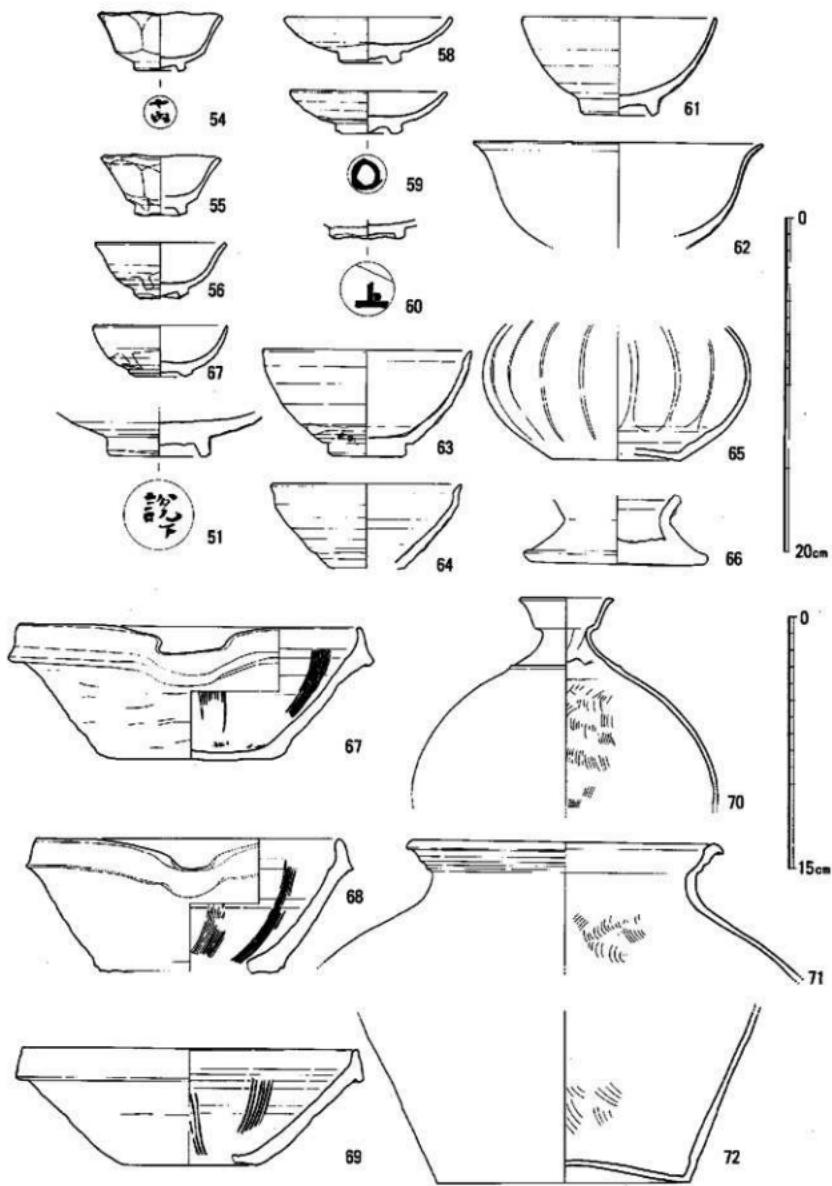
皿(58~60) 体部外面下半は露胎である。58・59は口縁部の1/2を欠失し、口径10.1・9.2cm、器高2.8・2.6cm、高台径3.7・4.0cmを測る。59の外底には墨書「○」が記されている。60は高台の4ヶ所に弧状の抉り込みが入った底部片で、外底に朱書「上」が記されている。

青白磁

碗(61・62) 61は内湾する体部から直線的に口縁部が開き、端部は薄くおさめられている。高台は外面を直し、疊付が斜めに削られ内縁を接地面とする。体部下半は回転ヘラ削りされ、全面に施



第12図 SD102出土青磁実測図



第13図 SD102出土陶磁器実測図

釉の後、疊付より内側の釉をカキ取り露胎としている。白色の胎土に無色透明の釉が掛けられ、貫入が著しい。口径11.6cm、器高5.9cm、高台径4.7cmを測る。62は内湾しながらびる部から外反する口縁部がつき、端部は薄くおさめられる。器周1/3残存の復元口径17.3cmを測る。胎土は白色を呈し、釉はマットな灰白色に発色し、ピンホールがみられる。

黒釉陶器

碗 (63・64) 63は口縁部下をぐくわざかにくぼめた束口の碗で、内削りがほとんどない円盤の高台を有し、高台脇は水平に削り出され体部との境は鋭く稜をなす。灰白色の緻密な胎土にオリーブ黒色の釉が体部下半まで掛けられ、貫入が著しい。器周1/2残存の復元口径12.5cm、器高6.4cm、高台径4.7cmを測る。体部外面下位の露胎部に判読不明の朱書が記されている。64も束口の碗で、底部は欠失している。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は薄くおさめられ外に開く。褐色の緻密な胎土に黒褐色～にぶい赤褐色の釉が体部下半まで掛けられている。

陶器

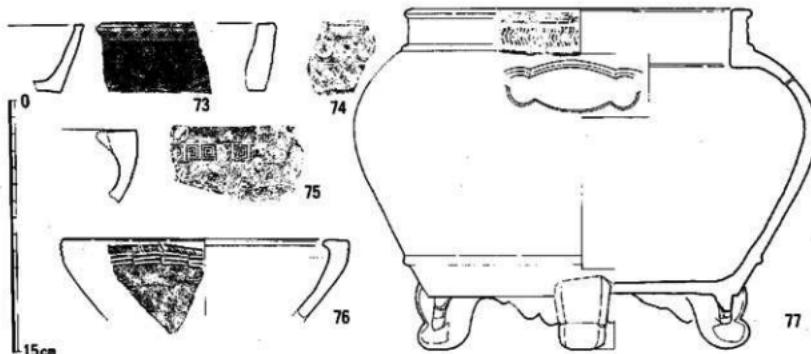
壺 (65) 朱泥の器種は茶壺になろうか。瓜割りの肩部外面は丁寧に研磨され、内面は横ナテ痕が顯著に残る。肩部1/4、底部1/3からの復元肩部最大径16.0cm、復元底径7.6cmを測る。胎土は精良、緻密で、赤褐色(2.5YR 3/6)を呈する。江蘇省宜興窯産のものであろうか。

陶器

華瓶 (66) 潮戸産の尊形の華瓶の底部であろう。底部は回転糸切離しにより、内面には鋭く稜をなしたロクロ目が顕著に残る。灰白色の胎土に灰オリーブ色の釉が施され、貫入が著しい。

陶器

摺鉢 (67～69) 備前焼IV期の摺鉢である。67の口縁部はN字状をなし、口縁端部を平坦におさめ内傾させ、内面には9本単位の筋目が入る。体部下半は使用により磨滅しており、筋目が消えかかっている。胎土には粗い砂粒を含み、灰褐色を呈する。器周1/2残存の復元口径27.0cm、器高10.8cm、底径14.6cmを測る。68の口縁部はく字状をなし、外面の肩曲部はやや下方に垂れる。口縁端部は丸くおさめ、内面には7本単位の筋目が入る。胎土には粗い砂粒を含み、灰色を呈する。器周1/4残存の復元口径24.0cm、器高10.6cm、復元底径14.0cmを測る。69はN字状口縁に、内傾する平坦な口縁端部を有し、内面には6本単位の筋目が入る。胎土には粗い砂粒を含み、赤褐色を呈する。器周1/8残存の復元口径26.5cm、器高9.3cm、底径10.6cmを測る。



第14図 SD102出土瓦質土器実測図

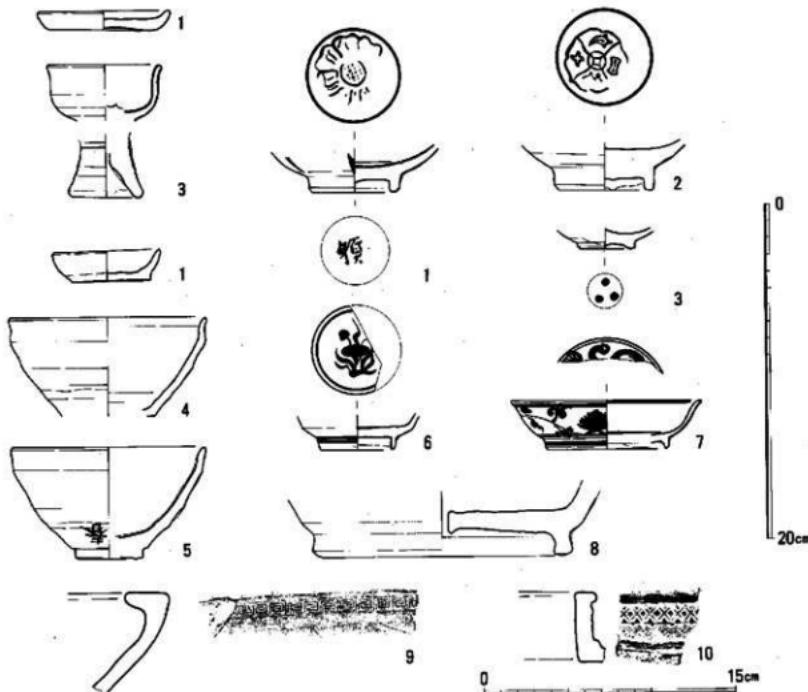
雜釉陶器 朝鮮王朝陶磁器である。

瓶 (70) 德利形の瓶で底部は欠失している。半球形の体部、短い頸部に大きく外反する二重口縁がつく。頸部と体部の境には断面三角形の突帯がめぐる。器壁は薄く、外面はナデ、体部内面には同心円のアテ具痕が残る。胎土は緻密で暗オリーブ色 (5Y 4/3) を呈する。灰オリーブ色 (7.5Y 5/3) の不透明な釉が残存する範囲では全面に施されている。口縁部の1/2が残存し、口径7.5cmを測る。

甕 (71・72) 接合できなかったが、同一個体であろう。口縁部はくの字状に開き、口縁端部は断面如意状を呈し、外端が下方に垂れる。口縁部下を強く横ナデし、外面は2条の断面三角形の突帯がめぐる。底部は弓なりにくぼんでいる。器壁は薄く、外面はナデ、一部叩き目が不明瞭に残り、体部内面には同心円のアテ具痕が残る。胎土は緻密で暗黄灰色 (2.5Y 4/2) を呈する。オリーブ灰色 (10Y 4/2) の不透明な釉が外底部の一部を除いて全面に施されている。口縁部の1/10を欠失し、口径25.2cmを測る。

瓦質土器

鉢 (73~77) 73・74は体部がやや外傾しながら直に近く立つ方形の鉢とみられ、口縁部下外面に73は二直文、74は2条の沈線間に菊花文をスタンプする。75・76は体部上位を内湾させ、口縁部は内側へ折り曲げ、上面を平らにする。口縁部下外面に印文帶をめぐらせる。77の口縁部は直立し、口縁部と体部上位に透かしを入れる。口縁部外面には波状文を押印する。体部外面下位に突帯を1条、底部端に脚を3個貼付する。



第15図 その他の造構・包含層出土遺物

SD103出土遺物（第15図、図版16）図示したものの他、墨書き瓦片が出土している（図版15）。

土師器 底部は回転糸切離しによる。

小皿（1） 内底まで回転横ナデされる。口径7.9cm、器高1.1cm、底径6.4cmを測る。

杯（2） 内底をナデ、外底に板状压痕が残る。口径13.2cm、器高2.6cm、底径8.3cmを測る。

青磁 高足杯（3） 内湾気味に直立の体部に外反する口縁部の杯部で、器周1/4残存の復元口径6.8cmを測る。灰白色の胎土にオリーブ灰色の釉が施されている。接合できなかったが、同一個体とみられる脚部が出土している。

包含層他出土遺物（第15図、図版16） 溝SD100～103の掘り込み、切り合いが確認される前の段階でその上面を包含層として掘り下げた。文末に取り上げる際のグリット番号が記されたものについては、いずれの造構に伴うものか推測できよう。

土師器 底部は回転糸切離しによる。

小皿（1） 内底をナデ、外底に板状压痕が残る。口径6.4cm、器高1.8cm、底径4.7cmを測る。F-6からの出土。

杯（2） 内底まで回転横ナデされる。口径13.8cm、器高2.9cm、底径8.1cmを測る。A-7からの出土。

青磁

碗（1・2） 1はSD102出土青磁碗（49）と同一規格をとるもので、高台内側途中まで施釉され、内底見込みの沈圓線内に花文をスタンプし、外底の露胎部分には墨書きが記されているが、判読不明。灰白色の胎土にオリーブ灰色の釉が施されている。試掘トレンチ出土。2は断面四角の高台内側途中まで施釉され、底部の器肉は厚い。内底見込みの沈圓線内に吉祥文を押印する。灰白色の胎土にオリーブ灰色の釉が施されている。

白磁

杯（3） 高台脇まで施釉され、外底に墨書き「..」が記されている。

黑釉陶器

碗（4・5） 4は束口の碗で、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は薄くおさめられ外に開く。底部が欠失しているが、高台脇の水平に削り出された部位まで残存する。灰白色の緻密な胎土に黒褐色～にぶい赤褐色の釉が体部下半まで掛けられている。C-5からの出土。5は口縁部下をごくわずかにくばめた束口の碗で、内割りは少ない。高台脇は水平に削り出され体部との境は鋭く稜をなす。灰白色の緻密な胎土に黒色の釉が体部下半まで掛けられ、貫入が著しい。器周1/2残存の復元口径11.6cm、器高6.7cm、復元高台径4.0cmを測る。体部外面下位の露胎部に逆さにした「春」の朱書きが記され、外底部にも朱書きが記されているが、判読不明である。

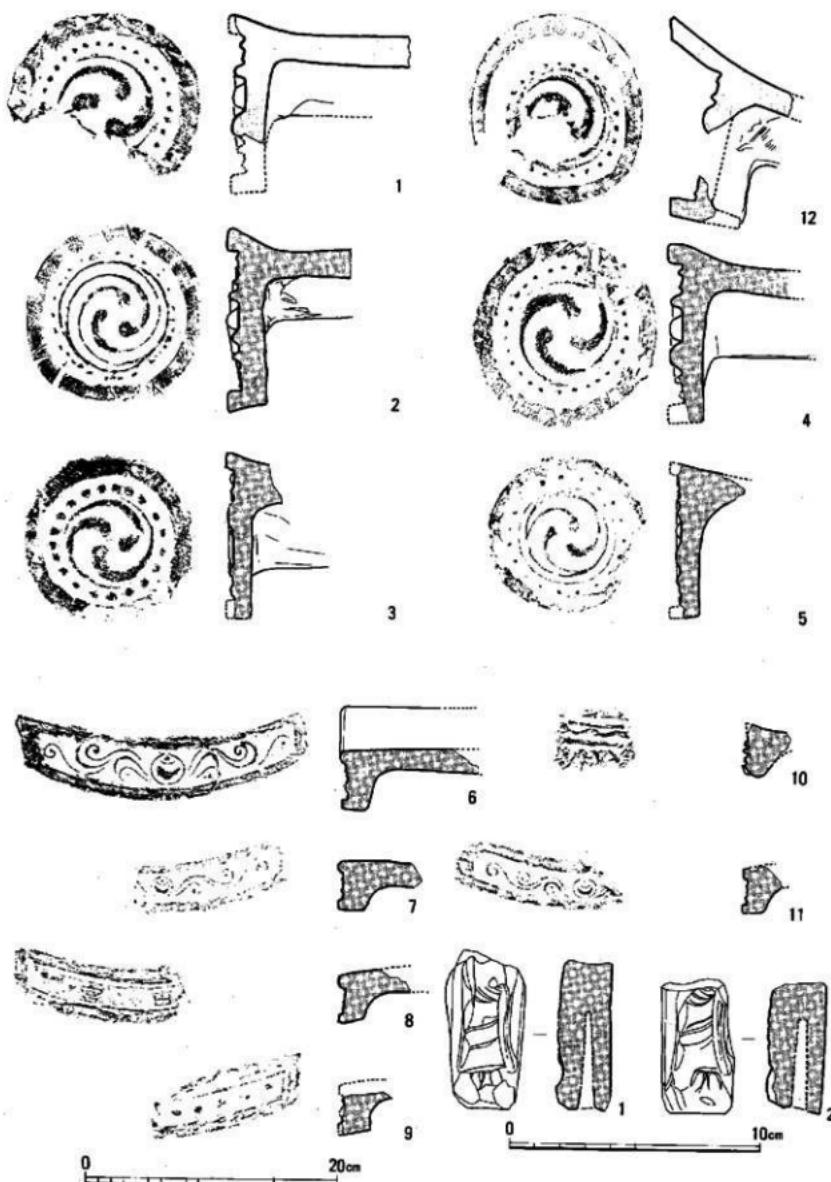
青花

碗（6） B群の底部片で、薄手の高台が直立している。内底見込みは二重の界線内に蓮束文を描く。V区からの出土。

皿（7） 口縁端反りの高台付皿B群である、外面は口縁部、腰部に界線をめぐらせ、体部に牡丹唐草、内底見込みの二重の界線の中に玉取獅子を配す。C-5からの出土。

陶器

鉢（8） 瀬戸産の大型の高台付鉢になろうか。底部の中心に径0.9mmの穿孔がみられる。灰白色の胎土に灰オリーブ色の釉が施され、貫入、ビンホールが著しい。穿孔部と高台内側が露胎となっており、高台内側に墨書きが記されているが、判読不明である。



第16図 瓦拓影・実測図

瓦質土器

鉢（9・10） 9は体部上位を内湾させ、口縁部は内側へ折り曲げ、上面を平らにする。口縁部下外面に雷文帯をめぐらせる。10の口縁部は直立し、外面に直造文を二段押印する。E-4からの出土。

瓦類

今回の調査では、軒平瓦、軒丸瓦、道具瓦、丸・平瓦が出土した。主として、SD100、SD102の埋土から出土した。総量は容量16lのコンテナ200箱。

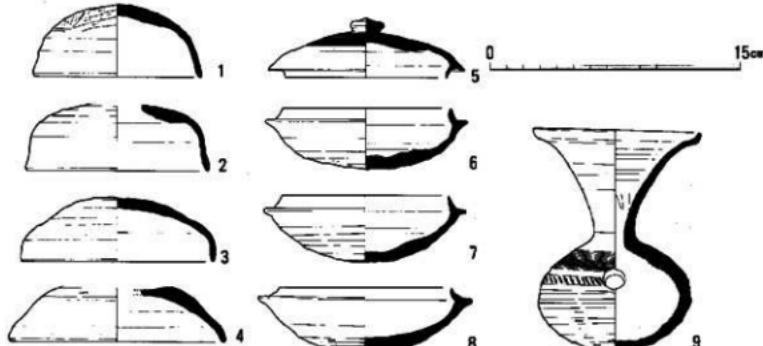
軒丸瓦（第16図、図版17）

1は瓦当径14.0cmで、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部は丸みをおび、尾は1/3ほど廻って他の巴に接している。外区は小さな珠文を配し、周縁の幅は1.2cmを測る。SD102出土。2は瓦当径13.7cmで、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部は丸みをおび、尾は半周して内外区を両する間線に接している。外区は小さな珠文22個を配し、周縁の幅は1.8cmを測る。SD100出土。3は瓦当径13.2cmで、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部は丸みをおび、尾は半周して他の巴に接している。外区は小さな珠文20個を配し、周縁の幅は1.4cmを測る。SD102出土。4は瓦当径14.2cmで、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部は丸みをおび、尾は1/3ほど廻って他の巴に接している。外区は小さな珠文28個を配し、周縁の幅は1.5cmを測る。SD100出土。5は瓦当径12.4cmで、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部はやや尖り気味である。尾は1/3ほど廻って他の巴に接し、円周をなしている。内区と外区の境は直線で画され、外区には小さな珠文19個を配し、周縁の幅は0.9cmを測る。SD102出土。

軒平瓦（第16図、図版17）

6は宝珠形の中心飾り、左右に3回反転する均整唐草文を配する。復元瓦当幅23.0cm、瓦当厚4.5cmを測る。SD100・102出土。7は宝珠形の中心飾り、左右に3回反転する均整唐草文を配する。復元瓦当幅19.0cm、瓦当厚3.5cmを測る。SD102出土。8は内区に「□田宮」の文字を配す。博多遺跡群内の櫛田宮周辺の調査で同范の瓦が出土しており、欠損部位には「櫛」の字が入る。復元瓦当幅24.0cm、瓦当厚4.0cmを測る。SD102出土。9は内区に珠文を配し、瓦当厚4.5cmを測る。SD102出土。10は12世紀代を中心に博多遺跡群に盛行する押圧波状文を瓦当に配した瓦で、1点のみ出土。11は宝珠形の中心飾り、左右に3回反転する均整唐草文を配する。復元瓦当幅21.0cm、瓦当厚3.5cmを測る。SD102出土。

道具瓦（第16図、図版17） 雁振瓦、鬼瓦が出土している。残存状態が良好なものについて報告す



第17図 SD130出土須恵器実測図

る。鬼瓦（図版17-13）は目、眉、鼻の破片が出土している。

雁壠瓦（12）

鳥糞に用いられたもので、軒丸瓦部と平瓦の接する部分が半円形に抉られている。SD102出土。

土製仏像（地蔵菩薩立像）（第16図、図版17）

1は頭部、2は肩部以上を欠失している。左手は胸前で宝珠を持ち、右掌は欠失している。瓦質に焼成されている。1がSD102、2はSD100出土。

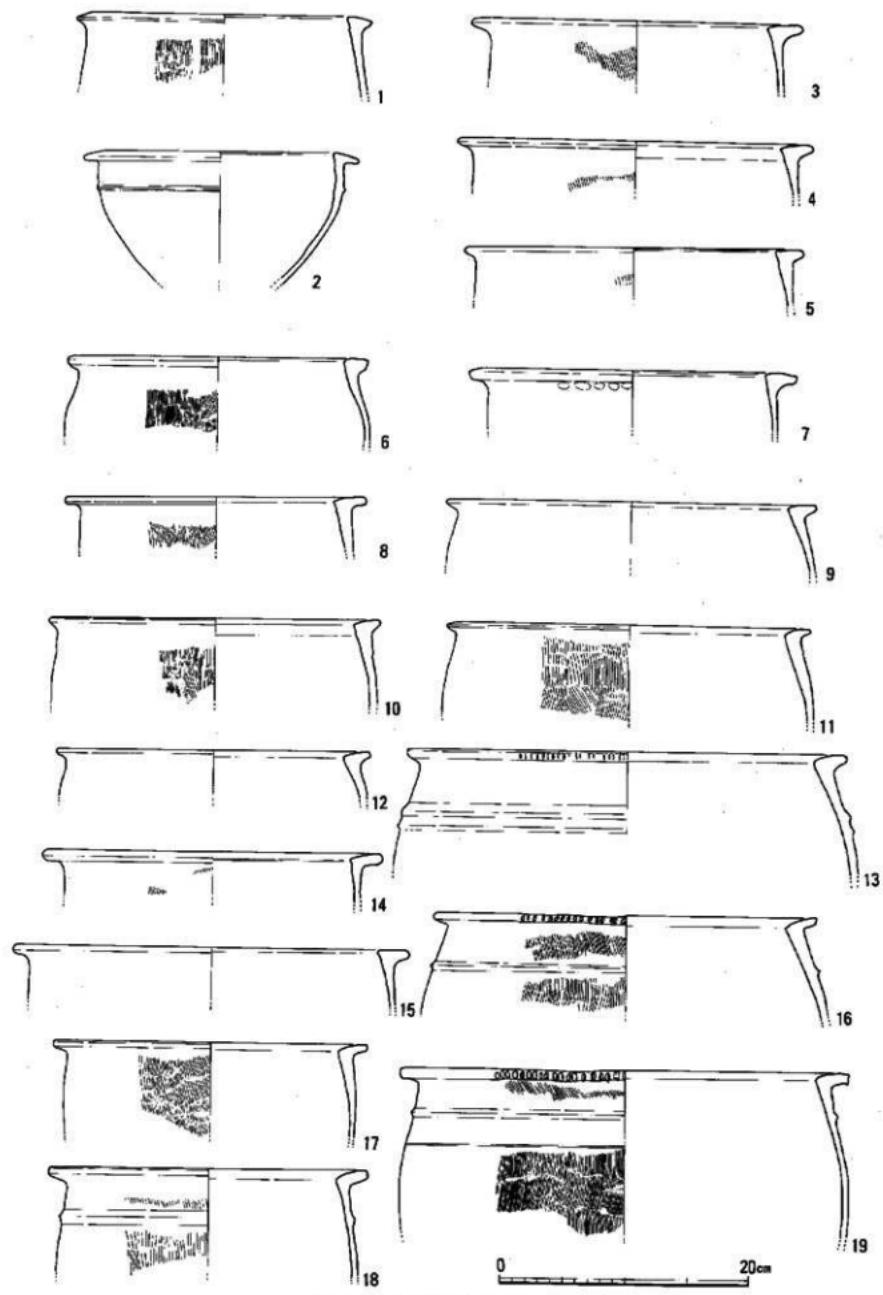
SD131出土遺物（第17図、図版16）

須恵器

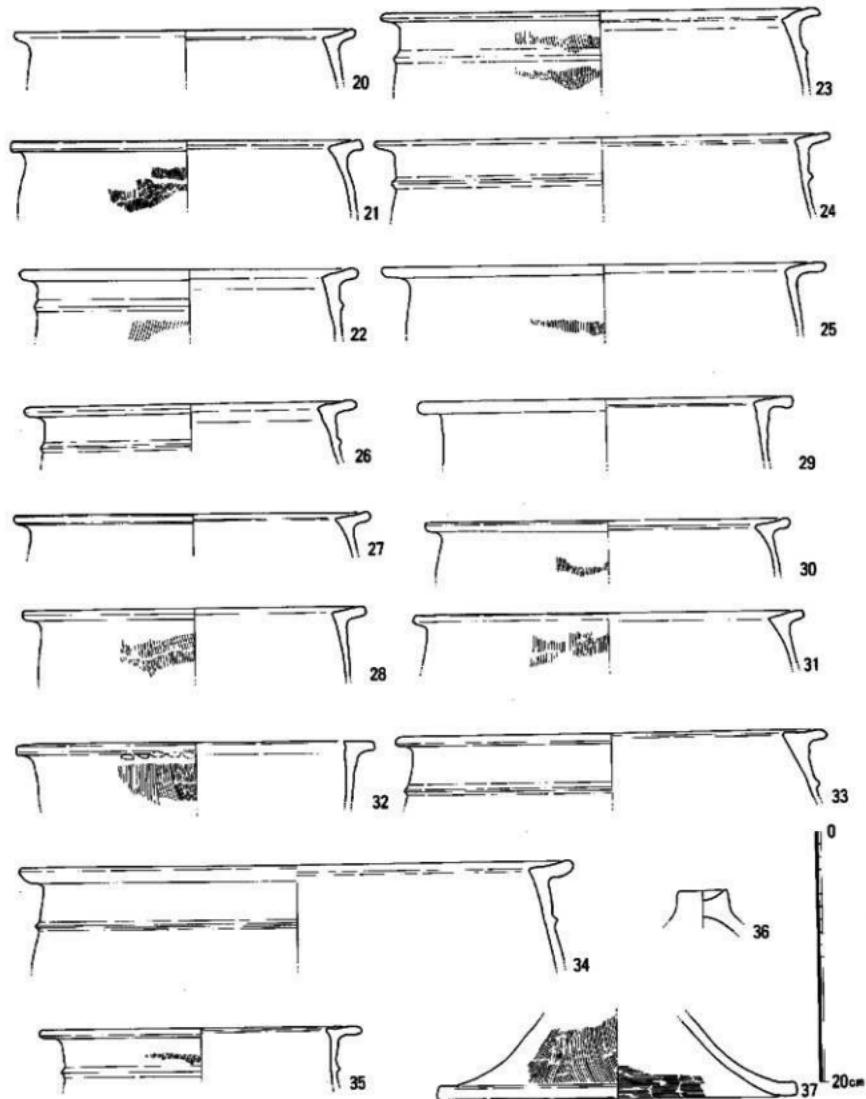
杯蓋（1～5） 1～4は口径10.2～13.0cm、器高3.9～4.3cmを測る。天井部と口縁部の境に段、沈線はなく丸くつくられ、口縁端部は丸くおさめられる。1は口縁部が直線的に開き、天井部外面は手持ちヘラ削りされ、その他の部位は回転横ナデが施される。口縁部にヘラ記号「/」を有する。2は口縁部がやや外反し、天井部外面は回転ヘラ削りされ、内面はナデ、その他の部位は回転横ナデが施される。3・4は口縁部が内湾して開き、天井部外面は3が未調整、4は回転ヘラ削りされ、内面はナデ、その他の部位は回転横ナデが施される。天井部外面に「女」字状のヘラ記号を有する。5はつまみ、身受けの返りを有し、天井部外面はカキ目、内面はナデ、その他の部位は回転横ナデが施される。口径11.7cm、器高3.6cm、返り径9.7cm、つまみ径2.0cmを測る。

杯身（6～8） 立ち上がりの高さは0.6～0.8cmを測り、基部から短く内傾する。口径10.0～10.3cm、器高3.6～4.0cm、受け部径12.2～12.8cmを測る。外底部は回転ヘラ削りされ、内底はナデ、その他の部位は回転横ナデが施される。6は微量の砂粒を含んだ精良な胎土で、非常に堅緻に焼成されている。外底部にヘラ記号「=○」を有する。7は土師質に焼成され、外底部に「女」字状のヘラ記号を有する。8は胎土に粗い砂粒を多量に含み、外底部にヘラ記号「×」を有する。

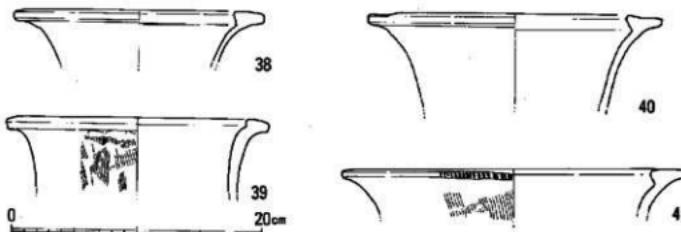
雞（9） 口頭部の基部は細く、口縁部は大きく外反して開き端部下で屈曲する。頭部内面には絞り痕が残る。体部は球形を呈し、肩部に凹線が2条めぐり、その間に刻み目を施している。調整は体部外面肩部より上位がカキ目、下半が回転ヘラ削り、口頭部上半、体部内面は回転横ナデが施される。



第18図 弥生土器実測図(1)



第18図 弥生土器実測図（2）



第20図 弥生土器実測図（3）

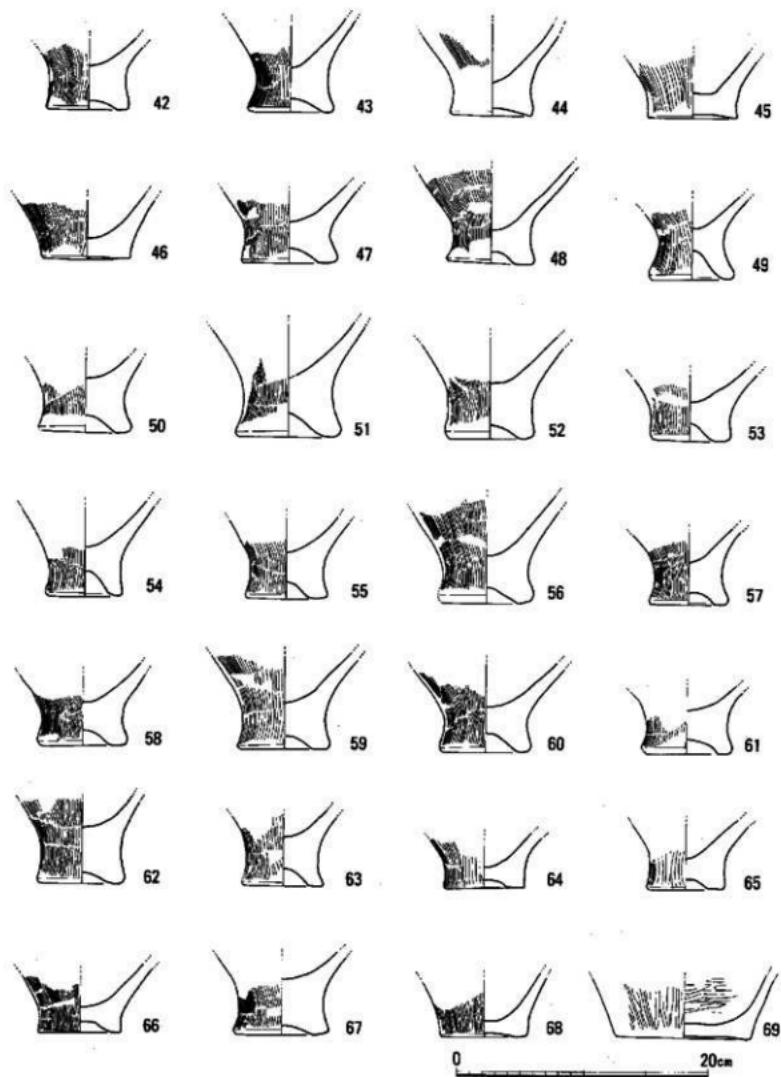
弥生土器（第18～21図、図版18・19）

壺（1～37）1・3～13の口縁部は断面三角形あるいは「コ」字形を呈し、1・3～5・7・8・10の胴部はほとんど張っていない。6・9・11・13は胴部上半部がすばみ胴部に張りをもつ。「コ」字形14～の口縁部は長めで断面逆L字形を呈し、内傾している。13・16・19は口縁端部に刻み目を施す。2・13・16・18・19胴部上半部に断面三角形の突帯をめぐらす。2・35の口縁部は断面鋸形を呈する。36・37は蓋である。

壺（38～41）断面鋸形を呈する口縁部で、41は口縁端部に刻み目を施す。

42～は底部片である。46・48・69を除き上げ底の形状をしめす。

出土部位は、47がD-1 I層、1・2・11・19・37・40・48・52・59・64がE-1 I層、42・53がE-3 I層、35がF-1 I層、12・20がF-5 I層、3がB-5 II層、5がB-6 II層、44・69がC-4 II層、36・49・65が44・69がC-6 II層、43・46・57がD-5 II層、57・58がD-7 II層、51・63がE-2 II層、16・17がE-4 I層、56がE-4 II層、33・54がE-5 II層、8・28・39・62がF-3 II層、6・14・21・22・29～31・45がF-4 II層、41・55がF-5 II層、36がF-6 I層、9・25・48・67がF-6 II層、50がSD100、24・34・60・61・64・66・69がSD102、4・7・10・13・15・18・26・27・38がSD103、23がSD131である。I層が中世包含層、SD100～103が中世の清、SD131は7世紀前半の清状造構であり、堀營造等に際して下層の遺物が混入したものである。II層については良好な遺物包含層である。調査区域周辺の古砂丘上の集落から流れ込んだものであろう。



第21図 弥生土器実測図 (4)

出土石器（第22・23回）

本調査では、第100・102・103号溝および第I・II層と中世の各遺構から石剣・石戈・石製穂摘み具など33点と砥石が出土した。ここでは出土した石製品のうち砥石を除いた石製品33点についてみていくこととする。

出土石器は、武器・農具・工具・漁具・その他に大別できる。

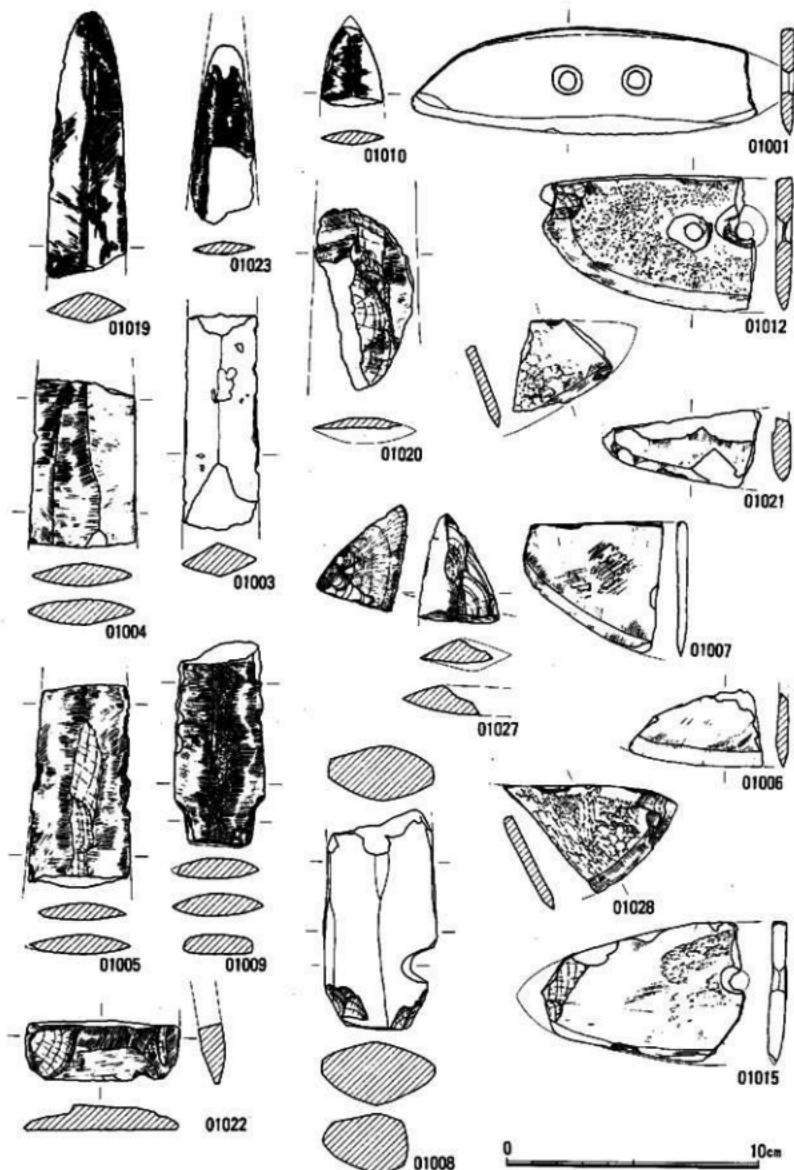
武器からみていくと、磨製石剣と石戈があり、1003が板岩？製、1004・1005・1009・1010・1019・1020・1023が安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製、1027が頁岩製、1022がその他の石材を用いた石剣で、1008はその他の石材を用いた石戈である。1010・1019は鋒先片、1023は鋒先近く片、1009は端部幅2.1cm・長さ1.6～2.05cmの茎部を持つ茎部から体部で、1022は石剣の茎部片と考えられ、ほかは体部片である。石剣の体部の横断面形は、1003・1019が菱形をなし、ほかは凸レンズ状をなしている。1027は石剣片ではなく扁平片刃石斧の刃部片の可能性もある。1008は基部近くの片方の辺縁に抉りを入れ、両側縁・基部端・体部は丁寧な研磨を加えており、基部端は長さ2.6cmを測る。

農具としては、収穫具の石製穂摘み具と石製穂摘み具未製品があり、いずれも安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で1001・1006・1007・1013・1015・1021・1028・1030・1032が製品、1002・1011・1012・1014・1016～1018・1024・1025は未製品である。1001は杏仁形を呈し、刃部は直線的で片刃を意識しており、紐縛用穿孔は表裏から行い、穿孔中心間は2.7cmを測る。ほかの石製穂摘み具はいずれも両刃をなし、1013の紐縛用穿孔中心間は2cmを測る。1002は敲打整形後、両刃の刃部および体部に研磨を加え穿孔を試みている。1018は板状をなす剥片を素材とし、縁辺に表裏から二次加工を加え、直線的な刃部を造りだし、表裏から紐縛用穿孔を行っており穿孔中心間は3.1cmを測る。打製の実用品か。

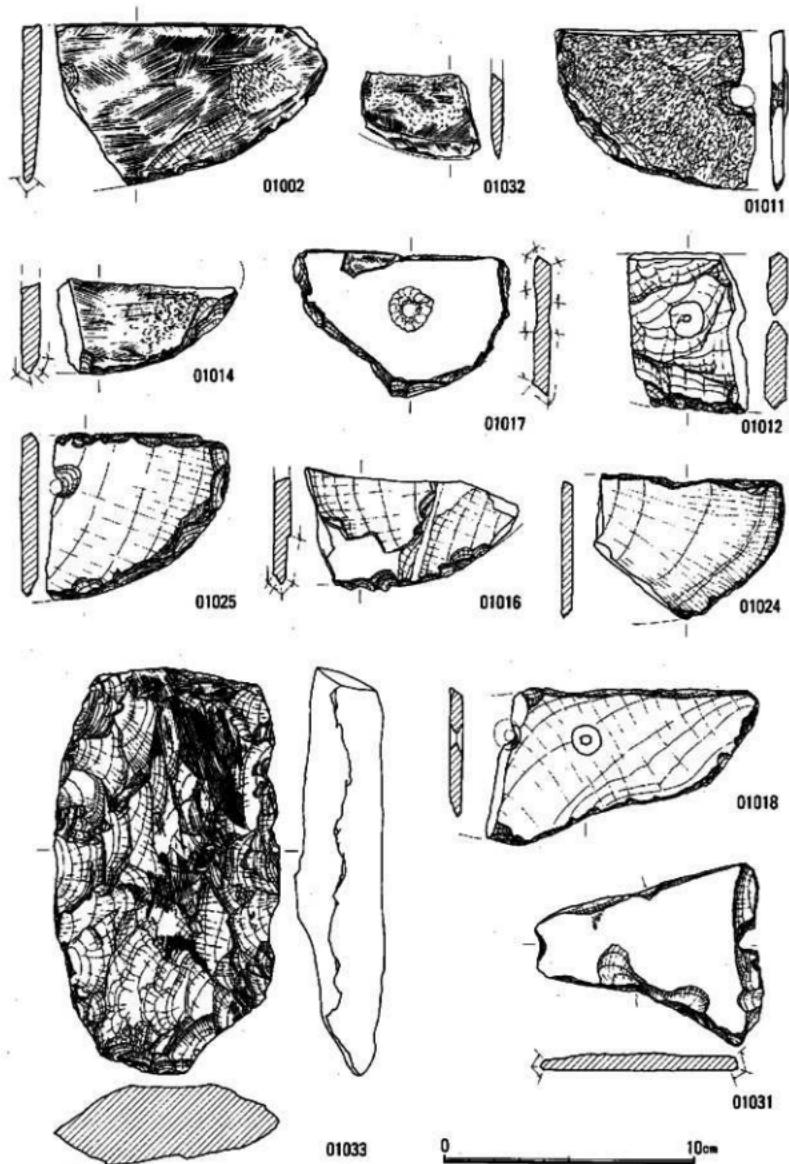
工具としては、安山岩を素材とした太型蛤刃斧未製品（1033）がある。表裏から粗い剥離加工を加え整形し、頭部と刃部を造りだし、体部の一部には研磨を加えている。

漁具としては、安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の石錐（1031）がある。扁平盤を素材とし相対する4ヶ所に表裏から粗い二次加工を加え縄縛用の抉り部を造りだしている。編錐の可能性もある。

以上の本調査出土の石製品は、武器が11点、農具が未製品を含め18点、工具未製品1点、漁具1点、その他2点で製品でみると武器が最も多い。石製穂摘み具および石製穂摘み具未製品は、製品の刃部に剥離加工が加わっているものがあることと本調査地の立地を考慮すると漁具の可能性もあり、漁具とするとすべて製品として使用可能であるといえよう。以上の出土石器は、出土上器から弥生時代中期初頭から中ごろのものといえよう。



第22図 石器実測図(1)



第23図 石器実測図（2）

V 小 結

聖福寺に間連する遺構の検出 溝SD100~103の項で述べた通り、これら溝は1563(永禄6)年に修復された中世の聖福寺古図に描かれた寺域の三方を画する堀の一部と考えている。

聖福寺境内とその四至については、聖福寺古図と『安山僧屋様』の分析を基に発掘調査の成果を加味した宮本雅明氏による復元試案が出されている。その中で往時と変わらない要素を抽出する過程で現況の聖福寺の伽藍配置の構成について検討されている。個々の建造物については澤村仁氏らによる「福岡県の近世社寺建築」、土田充義氏らによる「福岡市の近世社寺建築」に詳しいが、現存する伽藍は扶桑最初桟窟の額が掲げられている三門(『岩崎建設百年史』によると1911年完成)、仏殿(大虹梁下に打たれた奉獻板に記された銘によると1673年完成)、方丈(『聖福寺史』によると1845年完成)が一直線に並び、古図で仏殿と山門の間に表わされた法堂はみられない。その中軸線は聖福寺古図に描かれた中世以来の様子を今に伝え、仏殿の位置も不变であるとされている。宮本氏は論考の中で、現在の伽藍に法堂を加える場合禅宗寺院の伽藍配置の一般例を鑑み、方丈を背後に引くか山門を前面に出す必要があり、古図では方丈の背後に家並を街路の両側に描くので方丈の位置は不变とされた。

建造物が幾度かの戦乱等で失なわれても、基壇を補修して同じ位置に再建し、中世以来の伽藍が今に不变のまま伝えられている可能性もあるが、移動している可能性も強い。現況の伽藍では未だ発掘調査は行われていない。周辺域の調査を含め中世の寺域を確定するまでには至っていない。中世寺内町についての論考がなされているが、調査面積も狭隘であり推測の域を出るものではない。中世の寺城や伽藍の位置と規模の推定には慎重に史料批判、操作にあたるべきで、今後の発掘調査等の資料を多数得ることによって始めて決し得るものである。国史跡指定地の範囲についても線引きの見直し等を含め再考の余地は大いに残されている。

博多遺跡群第35・64次調査では13世紀末から16世紀後半まで機能した道路遺構が検出されている。幅6mを測り両側に側溝を配し、幹線道路とみられる。聖福寺伽藍の中軸線とは直交する。現在の聖福寺伽藍の前面に位置する第62・90次調査では13世紀後半以降の聖福寺伽藍の中軸線と平行する幅4mの道路遺構が検出されている。聖福寺の方へ延長すると現在の動使門付近に至る。今まで聖福寺前面で検出の道路遺構はそれらの調査例に限られ、支線道路の一つ、あるいは参道と考えられる。参道とみた場合、当時の伽藍が現在より南東に位置したこととなる。以上の調査例から伽藍の中軸線は中世以来不变の方位をとっているものの、四至の内、両側面については確定し難い。

古図には山門の前に總門が描かれているが、幹線道路に面していたとみる場合現況のその想定線まで30m前面に出ることとなり、それにともない三門が前面に出ることになる点で、宮本氏の案は首肯すべきものである。しかし、三門以下の伽藍の堂宇も前面に出ることとなるのではないだろうか。一方一町の伽藍を想定した場合、禅宗寺院の伽藍配置の一般例から伽藍背後の四至、方丈の後方は現在の仏殿付近とみられる。古図に描かれた方丈背後の街路とその両側に連なる家並、あるいは塔頭の空間を加えた場合、古図に描かれた寺域背後の堀は現在の方丈の背後を伽藍の中軸線とは直交して走り、今回の調査で検出された溝SD100~103と合致する。聖福寺収蔵庫で聖福寺墓地改葬の際出土した陶片を見る機会があったが、第94次調査検出の溝と同時期の青磁片が多くみられた。墓地の中でも現方丈背後の堀推定線で出土したものであろう。聖福寺が位置する御供所町は黒田如水・長政父子によって寺院を集めて形成された寺町と呼ばれる地域の一つである。個々の寺院の納骨堂建設や堂宇の改築に際して、福岡市教育委員会では文化財保護の一環として先ず試掘調査を実施しているが、今までのと

ころ聖福寺背後一帯では中世に遡る遺構は確認されておらず、寺域の拡がりの限界を示唆している。

第94次調査溝SD101から外底部に墨書「順心口」を記した備前焼底部片が出土した。調査区域が位置する順心庵を指すものであろう。博多遺跡群で寺院もしくは子院、塔頭名を記した中世の墨書では第64次調査出土の白磁底部片に記された永天寺塔頭「鈞寂庵」に次ぐものである。また、溝からは夥しい量の瓦片が出土しており、今回の調査地は中世の伽藍からさほど離れてはおらず、順心庵境内半近の位置に相当するとみられる。

溝個別の年代について 溝は土層観察からSD(101)・103→SD(101)・102→SD100の順に营造されており、出土遺物をみてもSD100からは青花碗・皿B群、青花皿B群と同じ器形の白磁皿、備前焼V期の摺鉢が出土しており廃絶の時期は16世紀前半とみられる。SD102は最も出土遺物が豊富であり、土師器は良好な一括資料として博多周辺の土器編年を構築していく上で基準となるものであろう。全国的にも出土例が少ない明前半代の竜泉窯青磁の他、白磁、黒釉陶器碗、備前焼摺鉢（IV期後半）等の共伴遺物によってその年代は15世紀中頃～後半に推定されよう。SD101・103の年代については出土遺物が少なく根拠に乏しくなるが、14世紀代によくみられる折縁の青磁杯、盤がみられないことからそれをやや遡る年代であろうか。今回の調査では14世紀を遡る時期の中世の遺構は検出されなかった。塙の营造がいつに遡るのか、今後の調査に期するものである。

仏教関係の遺物 溝SD100～103からは堂宇に葺かれたであろう夥しい量の瓦片、土製仏像2の他、灯明皿とみられる口縁部に煤が付着した土師器小皿が出土しているが、博多遺跡群の他の調査地に比べ出土点数は多い。単に灯火器としてではなく、万灯会のような祭儀に使用された可能性も考えられる。陶磁器に記された墨書については、中世前半のそれが中国人の姓、数量を記したもののが大半はあるのに対し、15世紀代の墨書は杯・皿の小物主体の白磁の外底部に「○」「×」「+」といった記号を記したものが多くなる。第94次調査出土の墨書陶磁器にはそれらの他に、青磁碗の外底部に「巖」「道口」「説口」と記したものがみられる。僧侶の名の一節を記したものか。また、墨書の他、朱で文字を陶磁器に記すものもみられた。青磁皿の外底に「十一」あるいは「什」、白磁皿の外底に「上」、黒釉陶器碗の体部外面下位の露胎部に「春」と朱書したものなどが出土しており、博多遺跡群の中でも異例である。寺院に関係することに起因するのであろうか。当時は貿易が制限を受け稀少であった輸入陶磁器についても、僧侶たちの並々ならぬ舶来の文物、ことに陶磁器に対する愛好を示していよう。

参考文献

- 澤村仁他「福岡県の近世社寺建築」1984福岡県教育委員会
土田完義他「福岡市の近世社寺建築」1990福岡市教育委員会
宮本雅明「空間指向の都市史」他「日本都市史入門！空間」1989東京大学出版会
「博多12」福岡市埋蔵文化財調査報告書第177集1988福岡市教育委員会
「博多47」福岡市埋蔵文化財調査報告書第396集1995福岡市教育委員会
「博多48」福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集1995福岡市教育委員会
「博多62」福岡市埋蔵文化財調査報告書第557集1998福岡市教育委員会

| 登録 番号 | 器種名 | 石 材 | 法 量 (cm) | 法 大 厚 | 扁 大 厚 | 出 土 地 點 | 備 考 |
|----------|------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------------|--|
| 1001 | 石製繩込み具 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 4.3 | 15.5 | 0.35 | SD-103 | 4区 面輪刃片刃か、穿孔中心間2.75mm。 穿孔を試みている。 |
| 1002 | 石製繩込み具木製品 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 6.4 | 4.4+ α | 10.7+ α | SD-103 | 5区 穿孔を試みている。 |
| 1003 | 磨製石劍 | 板岩? | 8.7+ α | 3.0+ α | 1.75+ α | SD-103 | 5区 |
| 1004 | 磨製石劍 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 6.7+ α | 5.75+ α | 1.05+ α | SD-103 | 5区 |
| 1005 | 磨製石劍 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 8.1+ α | 4.1+ α | 0.85 | SD-103 | 5区 |
| 1006 | 石製繩込み具 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 3.0+ α | 5.35+ α | 0.5 | SD-103 | 5区 |
| 1007 | 石製繩込み具 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 5.3+ α | 5.6+ α | 0.4 | SD-103 | 5区 |
| 1008 | 磨製石劍 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 8.3+ α | 4.6 | 2.65 | SD-103 | II層 |
| 1009 | 磨製石劍 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 8.20+ α | 3.6 | 0.9 | SD-102 | 4区 |
| 1010 | 磨製石劍 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 3.3+ α | 2.5+ α | 0.8+ α | SD-102 | 5区 |
| 1011 | 石製繩込み具未製品 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 6.4 | 8.0+ α | 0.7 | D-4 | II層 穿孔あり、剝離加工で刃部通りだし、体部は敲打を加えている。 |
| 1012 | 石製繩込み具未製品? | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 4.4 | 4.9+ α | 0.9 | D-6 | II層 穿孔を試みている。剝離加工で整形。 |
| 1013 | 石製繩込み具 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 5.3 | 8.6+ α | 0.65 | D-6 | II層 穿孔中心間2.0mm |
| 1014 | 石製繩込み具未製品 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 4.7+ α | 7.2+ α | 0.65 | B-6 | II層 |
| 1015 | 石製繩込み具 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | (5.7) | 8.0+ α | 0.6 | D-4 | II層 |
| 1016 | 石製繩込み具未製品 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 8.6+ α | 8.6+ α | 0.65 | D-15 | II層 剝離加工で削形、表面に一部研磨あり。 |
| 1017 | 石製繩込み具未製品 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 5.7 | 8.6 | 0.65 | D-6 | II層 剝離加工で鏡形後、体部に敲打を加え、表面から穿孔を試みている。 |
| 1018 | 石製繩込み具未製品 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 6.3 | 11.0+ α | 0.5 | F-6 | II層 穿孔中心間3.1cm、打製繩込み具の可能性あり。 |
| 1019 | 磨製石劍 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 10.6+ α | 4.1+ α | 0.7 | D-5 | II層 |
| 1020 | 磨製石劍 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 7.3+ α | 4.0+ α | 0.45+ α | D-5 | II層 |
| 1021 | 石製繩込み具 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 3.0+ α | 6.4+ α | 0.75 | E-5 | II層 |
| 1022 | 磨製石劍 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 2.4+ α | 6.1 | 1.05 | A-7 | II層 |
| 1023 | 磨製石劍 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 17.1+ α | 2.0+ α | 0.6+ α | C-1 | II層 |
| 1024 | 石製繩込み具未製品 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 7.6+ α | 4.45 | 0.65 | D-6 | II層 剝離加工で整形、穿孔を試みている。 |
| 1025 | 石製繩込み具未製品 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 6.7+ α | 7.75+ α | 0.65 | SD-102 | II層 剝離加工で整形。 |
| 1026 | 劍片 | 黑曜石 | | | | F-7 | II層 |
| 1027 | 磨製石劍 | 頁岩 | 4.55+ α | 3.1+ α | 0.11 | 3区 レンチII層 留丹片岩石斧か。 | |
| 1028 | 石製繩込み具 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 4.25+ α | 6.9+ α | 0.45+ α | SD-100 | I層 |
| 1029 | 磨製石劍 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 4.5 | 4.5 | C-5 | I層 | |
| 1030 | 石製繩込み具 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 3.9+ α | 3.9+ α | 0.45 | I層 | |
| 1031 | 石劍 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 7.0 | 9.3 | 0.7 | 地盤I | |
| 1032 | 石製繩込み具 | 安山岩質繩灰岩ホルンフェルス | 4.7+ α | 3.3+ α | 0.5 | 地盤II | |
| 1033 | 大型磨り石斧未製品 | 安山岩 | 15.2 | 9.1 | 3.5 | SD-102 | |

第1表 博多遺跡群第4次調査出土石器一覧表

| No | | 層位 | 地区 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土の色調 | 釉の色調 |
|--------------|---------|-----|------|--------|-------|-------|-------------------------------|-----------------|
| SD100 | | | | | | | | |
| 3 | 青磁香炉 | I層 | V区 | | | 3.2 | 灰白(7.5Y 7/1) | 灰オリーブ(7.5Y 6/2) |
| 4 | 白磁皿 | II層 | II区 | 12.2 | 2.7 | 6.2 | 灰白(7.5Y 8/1) | 灰白(7.5Y 8/1) |
| 5 | 白磁皿 | II層 | VII区 | 12.2 | 2.7 | 6.3 | 灰白(7.5Y 8/1) | 灰白(7.5Y 8/1) |
| 6 | 青花碗(B群) | I層 | IV区 | | | (5.2) | | |
| 7 | 青花皿(B群) | I層 | III区 | (11.2) | 2.9 | (6.7) | | |
| 8 | 青花皿(B群) | I層 | II区 | (12.3) | 2.5 | (7.2) | | |
| 9 | 黒釉陶器碗 | I層 | V区 | (12.3) | | | にぶい橙(5YR 7/4) 明褐灰(5YR 7/1) | 黒褐(5YR 2/1) |
| 10 | 黒釉陶器碗 | I層 | II区 | (12.3) | 6.8 | 3.6 | 灰白(5Y 8/2) | オリーブ黒(5Y 2/2) |
| 11 | 黒釉陶器碗 | I層 | | (17.0) | 5.4 | 4.2 | 灰白(5Y 8/2) | 黒褐(2.5Y 3/2) |
| 12 | 緋釉陶器皿 | I層 | | (10.4) | 2.6 | 3.9 | 黄灰(2.5Y 6/1) | 黄灰(2.5Y 5/1) |
| 13 | 緋釉陶器皿 | II層 | | (15.8) | | | 灰白(2.5Y 8/1) | 灰白(2.5Y 8/1) |
| 14 | 陶器鉢 | I層 | III区 | 16.8 | 5.5 | 9.2 | 褐(7.5YR 4/6) | 褐(7.5YR 5/8) |
| 15 | 陶器すり鉢 | I層 | VII区 | (20.5) | 9.3 | | 灰褐(5YR 4/2) | |
| SD101 | | | | | | | | |
| 1 | 陶器 | | VII区 | | | | 赤褐(5YR 4/8) | |
| 2 | 緋釉陶器碗 | | 1区 | (14.8) | 6.1 | 4.8 | 灰白(2.5Y 7/1) | 灰白(10Y 7/1) |
| 3 | 青磁皿 | | III区 | 13.8 | 3.9 | 8.5 | 灰白(7.5Y 7/1) | オリーブ灰(10Y 6/2) |
| 4 | 青磁盤 | | V区 | (30.8) | (7.0) | 16.0 | 黄橙(7.5YR 8/3) 灰白(7.5Y 7/1) | オリーブ灰(10Y 5/2) |
| SD102 | | | | | | | | |
| 40 | 青磁碗 | I層 | VII区 | (18.0) | | | 灰白(7.5Y 7/1) | 灰オリーブ(7.5Y 6/2) |
| 41 | 青磁碗 | I層 | V区 | 15.8 | 8.7 | 6.8 | 灰白(7.5Y 8/1) | 灰オリーブ(7.5Y 6/2) |
| 42 | 青磁碗 | I層 | V区 | (16.8) | 8.5 | 6.8 | 灰白(7.5Y 7/1) | オリーブ灰(10Y 6/2) |
| 43 | 青磁碗 | II層 | IV区 | 21.9 | 10.2 | 9.2 | 灰白(7.5Y 7/1) | オリーブ灰(10Y 4/2) |
| 44 | 青磁碗 | II層 | I区 | (11.7) | 5.8 | 5.2 | 灰白(7.5Y 7/1) | オリーブ灰(10Y 6/2) |
| 45 | 青磁碗 | II層 | I区 | 13.5 | 6.7 | 5.6 | 灰白(7.5Y 7/1) | オリーブ灰(10Y 6/2) |
| 46 | 青磁碗 | I層 | VII区 | (23.0) | | | 灰白(7.5Y 7/1) | オリーブ灰(10Y 6/2) |

第2表 博多遺跡群第94次調査出土陶磁器観察表(1)

| No | | 層位 | 地区 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土の色調 | 釉の色調 |
|----|-------|-----|------|--------|------|--------|----------------|-------------------------------|
| 47 | 青磁碗 | I層 | IV区 | 11.8 | 6.1 | 5.5 | 灰白(7.5Y 7/1) | 灰オリーブ(7.5Y 6/2) |
| 48 | 青磁碗 | II層 | I区 | 13.0 | 5.7 | 5.2 | 灰白(7.5Y 7/1) | 明オリーブ灰(SGY 7/1) |
| 49 | 青磁碗 | | VII区 | | | 5.5 | 灰白(7.5Y 7/1) | オリーブ灰(10Y 6/2) |
| 50 | 青磁碗 | | VII区 | | 4.8 | | 灰(7.5Y 6/1) | オリーブ灰(10Y 5/2) |
| 51 | 青磁碗 | II層 | II区 | | | 6.2 | 灰白(7.5Y 7/1) | 灰オリーブ(7.5Y 5/2) |
| 52 | 青磁皿 | I層 | V区 | (13.0) | 3.4 | 7.6 | 灰白(7.5Y 7/1) | オリーブ灰(10Y 6/2) |
| 53 | 青磁高足杯 | | II区 | (6.6) | | | 灰白(7.5Y 7/1) | オリーブ灰(10Y 6/2) |
| 54 | 白磁八角杯 | II層 | II区 | 7.4 | 3.5 | 3.1 | 灰白(N 8/) | 無色透明 |
| 55 | 白磁八角杯 | I層 | III区 | (7.2) | 3.6 | (3.1) | 灰白(5Y 8/1) | 灰白(5Y 8/2) |
| 56 | 白磁杯 | I層 | IV区 | 7.8 | 3.4 | 3.2 | 灰白(5Y 8/2) | 無色透明 |
| 57 | 白磁杯 | I層 | I区 | (8.1) | 3.1 | 3.8 | 灰白(7.5Y 8/1) | 灰白(7.5Y 8/1) |
| 58 | 白磁皿 | I層 | V区 | 10.1 | 2.8 | 2.7 | 灰白(5Y8/2) | 灰白(5Y 8/2) |
| 59 | 白磁皿 | I層 | II区 | 9.2 | 2.6 | 4.0 | 灰白(7.5Y 8/1) | 灰白(10Y 8/1) |
| 60 | 白磁皿 | I層 | VII区 | | | 4.5 | 灰白(5Y 8/1) | 灰白(5Y 8/1) |
| 61 | 青白磁碗 | II層 | V区 | 11.6 | 5.9 | 4.7 | 白色 | 無色透明 |
| 62 | 青白磁碗 | I層 | II区 | (17.3) | | | 灰白(7.5Y 8/1) | 灰白(10Y 8/1) |
| 63 | 黒釉陶器碗 | I層 | VII区 | (12.5) | 6.4 | 4.7 | 灰白(N 7/1) | オリーブ黒(SGY 2/1) |
| 64 | 黒釉陶器碗 | | VII区 | (11.3) | | | 褐灰(10YR 6/1) | 黒褐(5YR 2/1) にぶい赤褐(5YR 4/4) |
| 65 | 陶器壺 | II層 | V区 | | | (7.4) | 暗赤褐(2.5YR 3/6) | |
| 66 | 陶器瓶 | II層 | I区 | | | 11.0 | 灰白(7.5Y 7/1) | 灰オリーブ(7.5Y 6/2) |
| 67 | 陶器摺鉢 | I層 | V区 | (27.0) | 10.8 | 14.6 | 灰褐(5YR 5/2) | |
| 68 | 陶器摺鉢 | I層 | 236 | (24.0) | 10.6 | (14.0) | 灰(N5/) | |
| 69 | 陶器摺鉢 | II層 | | (26.5) | 9.3 | (10.6) | 暗赤褐(2.5YR 3/4) | |
| 70 | 陶器瓶 | II層 | VII区 | (7.5) | | | 暗オリーブ(5Y 4/3) | 灰オリーブ(7.5Y 5/3) |
| 71 | 陶器壺 | | IV区 | 25.3 | | | 暗黄灰(2.5Y 4/2) | オリーブ灰(10Y 4/2) |
| 72 | 陶器壺 | | IV区 | | | 20.0 | 暗黄灰(2.5Y 4/2) | オリーブ灰(10Y 4/2) |

SD103

| | | | | | | | | |
|---|-------|--|-----|-------|--|-----|--------------|----------------|
| 3 | 青磁高足杯 | | IV区 | (6.8) | | 4.4 | 灰白(7.5Y 7/1) | オリーブ灰(10Y 6/2) |
|---|-------|--|-----|-------|--|-----|--------------|----------------|

第3表 博多遺跡群第94次調査出土陶磁器観察表(2)

| No | | 層位 | 地区 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土の色調 | 釉の色調 |
|----|---------|----|------|--------|-----|-------|--------------|-------------------------------|
| 3 | 青磁碗 | 試掘 | トレンチ | | | 5.5 | 灰白(7.5Y 7/1) | オリーブ灰(10Y 5/2) |
| 4 | 青磁碗 | I層 | | | | 6.0 | 灰白(7.5Y 7/1) | オリーブ灰(10Y 6/2) |
| 5 | 白磁杯 | I層 | V区 | | | 3.4 | 灰白(7.5Y 8/2) | 灰白(7.5Y 8/2) |
| 6 | 黑釉陶器碗 | I層 | C-5 | (11.7) | | | 灰白(10YR 7/1) | 黒褐(5YR 2/1) にぶい赤褐(5YR 4/4) |
| 7 | 黑釉陶器碗 | I層 | | (11.6) | 6.7 | (4.0) | 灰白(7.5Y 7/1) | 黒(2.5Y 2/1) |
| 8 | 青花碗(B群) | I層 | C-5 | | | (4.4) | | |
| 9 | 青花皿(B群) | I層 | | (11.4) | 2.9 | (7.2) | | |
| 10 | 陶器鉢 | I層 | III区 | | | 15.5 | 灰白(7.5Y 7/1) | 灰オリーブ(7.5Y 6/2) |

第4表 博多遺跡群第94次調査出土陶磁器観察表（3）

| 辨別番号 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) | 辨別番号 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) | 辨別番号 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) |
|--------------|--------|--------|--------|------------|--------|--------|--------|--------------|--------|--------|--------|
| SD100 | | | | 14. | 11.5 | 2.6 | 8.6 | 33. | 6.8 | 2.0 | 3.1 |
| 土師器小皿 | | | | 15. | 11.7 | 2.6 | 7.5 | 34. | (8.2) | 1.6 | (3.8) |
| 1. | 6.1 | 1.7 | 4.2 | 16. | 12.0 | 2.3 | 7.6 | 35. | 9.2 | 2.2 | 2.8 |
| 2. | 6.2 | 1.6 | 4.3 | 17. | 12.1 | 2.2 | 8.2 | 土師器耳皿(大内系) | | | |
| SD102 | | | | 18. | 12.2 | 2.4 | 7.4 | 36. | 4.7 | 1.9 | 2.4 |
| 土師器小皿 | | | | 19. | 12.2 | 2.4 | 7.9 | 土師器杯(大内系) | | | |
| 1. | 5.9 | 1.5 | 4.4 | 20. | 12.2 | 2.5 | 8.1 | 37. | 11.0 | 4.5 | 4.4 |
| 2. | (6.0) | 1.3 | 4.5 | 21. | 12.2 | 2.6 | 8.1 | 38. | 13.0 | 3.6 | 4.4 |
| 3. | 6.3 | 1.6 | 4.8 | 22. | 12.3 | 2.6 | 9.1 | 39. | 12.5 | 2.5 | 5.8 |
| 4. | 6.5 | 1.7 | 4.4 | 23. | 12.4 | 2.3 | 8.8 | SD103 | | | |
| 5. | 6.5 | 1.7 | 4.0 | 24. | 12.5 | 2.7 | 8.8 | 土師器小皿 | | | |
| 6. | 6.5 | 1.7 | 4.9 | 25. | 12.6 | 2.3 | 9.4 | 1. | 7.9 | 1.1 | 6.4 |
| 7. | (6.5) | 2.0 | 4.5 | 26. | 12.6 | 2.4 | 8.3 | 土師器杯 | | | |
| 8. | 7.1 | 1.3 | 5.8 | 27. | 12.6 | 2.7 | 8.6 | 2. | 13.2 | 2.6 | 8.3 |
| 9. | 7.2 | 1.6 | 5.7 | 28. | 12.7 | 2.4 | 8.9 | A-7 1層 | | | |
| 10. | 7.5 | 1.7 | 5.4 | 29. | 12.8 | 2.7 | 7.4 | 土師器杯 | | | |
| 11. | 7.6 | 1.5 | 5.9 | 30. | 12.9 | 2.3 | 8.9 | 2. | 13.8 | 2.9 | 8.1 |
| 12. | 7.6 | 1.7 | 5.4 | 土師器小皿(大内系) | | | | F-6 1層 | | | |
| 土師器杯 | | | | 31. | 6.7 | 1.9 | 3.8 | 土師器小皿 | | | |
| 13. | 11.5 | 2.3 | 8.4 | 32. | (6.8) | 1.7 | (2.9) | 1. | 6.4 | 1.8 | 4.7 |

第5表 出土土器計測表

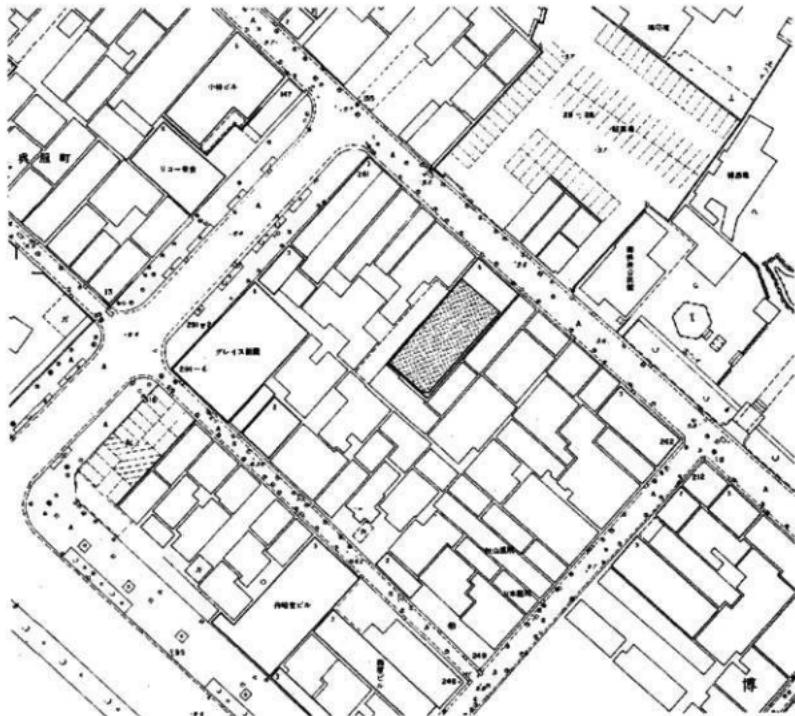
I はじめに

1 調査にいたる経過

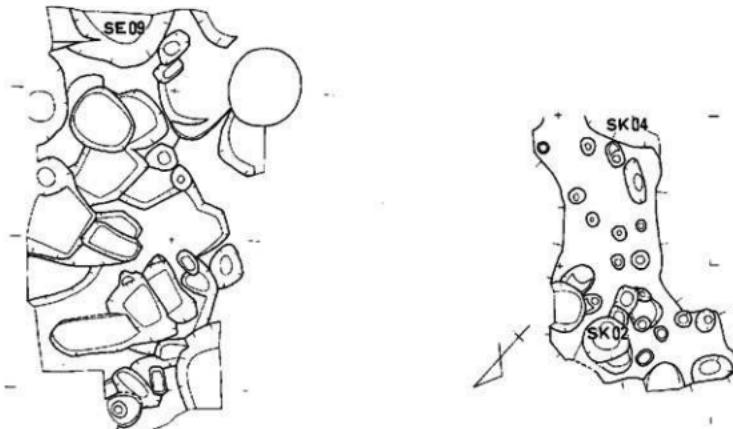
1997(平成9)年9月6日、株式会社三共から本市に対して博多区御供所町5-20における共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財の事前審査の申請がなされた。申請地は博多遺跡群の中央よりやや北東、国指定史跡聖福寺境内の北、現況の伽藍から約80m北東、聖福寺塔頭瑞應庵の北西60mに位置する。東側では第102次調査が行われている。

福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、これを受けて1997(平成9)年6月20日に試掘調査を実施した。現況は既設のRCの建造物が取り壊され、更地となっていた。申請面積は355.43m²で、旧町屋の区割をとどめる北西に向きを取る短冊形の申請地の中央と北西端に北西方方向のトレンチを設定した。調査の結果、既存の建造物の基礎と解体工事により、現地表下2.6~2.8mまでは遺構は残存していないことが確認された。

株式会社三共と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもち、工事発注後、基礎工事に先立つ鋤取り工事で遺構が確認された時点で工事を一時中断し、遺構の検出、写真撮影、実測等の記録保存、



第24図 博多遺跡群第106次調査地域周辺図



第25図 博多遺跡群第94次調査発掘配置図(1/100)

出土遺物の取り上げを行うこととし、株式会社三共と福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する受託契約を締結し、調査は翌1998（平成10）年3月13日から3月26日まで行われた。

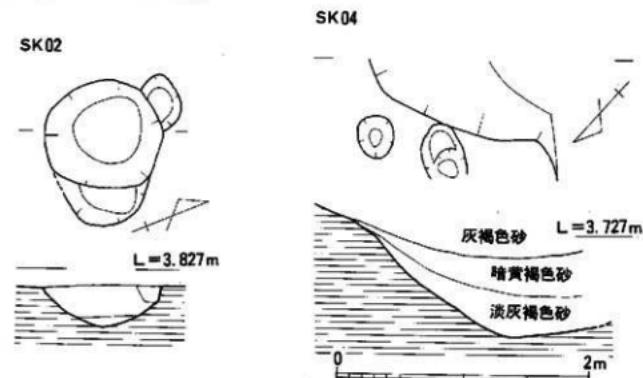
2 調査の組織

調査委託 株式会社 三共

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝（前任） 柳田純孝

第2係長 山口謙治



第26図 土壌実測図

庶務担当 河野淳美（前任） 谷口真由美

調査担当 試掘調査 松村道博 屋山洋

発掘調査 佐藤一郎

発掘調査・資料整理協力者 尾花憲吾・新郷英弘・中村米重・福井裕・尾崎真佐子・河津信子・古賀美恵子・古閑真理子・為房紋子・播磨博子・山口慶子・吉住シヅエ・吉田恵美・萬スミヨ・相川和子・田中ヤス子・富永勢津子・橋口真弓・藤野邦子・藤村佳公恵

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について株式会社三共、施工の株式会社高松組の方々をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

II 発掘調査の概要

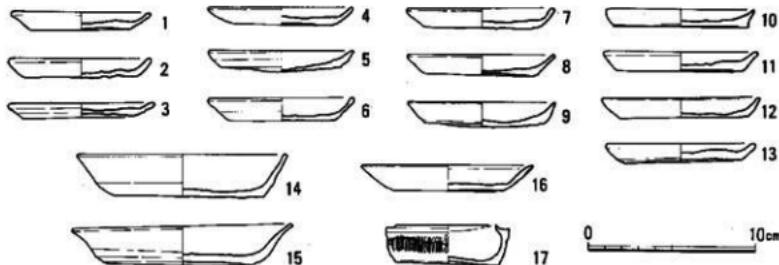
試掘調査により、既存の建造物の基礎とその解体工事による搅乱が深く及び、現地表下3mまでは遺構が残存しないことが確認されている。最初に北西半部で、試掘調査で確認されたレベルより上で島状に残存していた部分12m²（標高3.6m、地山の黄白色砂）の調査を行った。北西半部の調査終了後、引き続いて南東半部で遺構の検出を行った。当初の遺構面は地山より下のレベル（標高3.0m）まで失われ、搅乱が著しい。北西半部では土壌5基、柱穴・ピット状遺構20を検出した。遺構の時期は8~14世紀である。南東半部では井戸1基が検出された。下部のみの残存で、木桶の井戸枠底が残存していた。遺物は遺構の他に、上面の搅乱層から多量に出土した。コンテナ20箱。搅乱層からは土師器や瓦が特に多く、遺物の時期は16世紀までと時期幅が広い。

III 遺構と遺物

1 検出遺構

SK02（第26図、図版10） 調査区の南西で検出した。平面形は略円形を呈する。径0.9m、深さ35cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。完形に近い状態で土師器小皿・杯、白磁皿、陶器合子が出土している。

SK04（第26図、図版10） 調査区の東端で検出した。遺構の南西は搅乱を受けている。径2.0m以上、深さ0.6mを測る。壁は斜めに立ち上がる。須恵器杯細片、土師器甕細片が出土している。遺構の時期は8世紀前半とみられる。



第27図 博多遺跡群第106次出土遺物実測図

2 出土遺物

SK02出土遺物 (第27図、図版20)

土師器 底部は回転糸切離しによる。内底はナテ、外底に板状圧痕が残る。成形の精粗、胎土に混和されている砂粒や色調など個々多様である。

小皿 (1~13) 6・11は体部と底部の境は鋭く稜をなし底部は偏平で、丁寧に成形されている。口径8.4~9.5cm、器高0.8~1.5cm、底径5.9~8.2cmを測る。

杯 (14~15) 口径12.7~13.3cm、器高2.5cm、底径8.6~9.0cmを測る。

白磁 皿 (16) 口縁端部を口禿にし、灰白色の釉を全面に掛けている。口径10.4cm、器高1.6cm、底径6.6cmを測る。(IX-1-a類)。

陶器

合子 (17) 型造りにより体部外面中位に連子状文を浮き出している。灰白色の胎土にオリーブ色の釉が掛けられている。蓋受け部と体部外面下半以下を露胎としている。口径7.5cm、受け部径8.4cm、器高2.3cm、底径6.2cmを測る。

| 擇図 番号 | 口径 (cm) | 器高 (cm) | 底径 (cm) | 擇図 番号 | 口径 (cm) | 器高 (cm) | 底径 (cm) | 擇図 番号 | 口径 (cm) | 器高 (cm) | 底径 (cm) |
|----------|------------|------------|------------|----------|------------|------------|------------|----------|------------|------------|------------|
| SK02 | | | | 5. | 8.7 | 1.3 | 7.0 | 11. | 9.3 | 1.2 | 7.4 |
| 土師器小皿 | | | | 6. | 8.8 | 1.4 | 6.3 | 12. | 9.5 | 1.3 | 7.7 |
| 1. | 8.4 | 1.1 | 6.0 | 7. | 8.8 | 1.2 | 7.1 | 13. | 9.0 | 1.2 | 7.0 |
| 2. | 8.5 | 1.2 | 6.6 | 8. | 8.8 | 1.2 | 6.2 | 土師器杯 | | | |
| 3. | 8.7 | 0.8 | 8.6 | 9. | 8.8 | 1.5 | 7.2 | 14. | 12.7 | 2.5 | 9.0 |
| 4. | 8.7 | 1.1 | 5.9 | 10. | 9.0 | 1.1 | 8.2 | 15. | 13.3 | 2.5 | 8.6 |

第6表 博多遺跡群第106次調査出土土師器法量表

図 版



(1) 博多遺跡群第 94 次調査地から聖福寺を望む（東から）



(2) 博多遺跡群第 94 次調査 I 層上面全景（北から）

図版 2



(1) 博多遺跡群第 94 次調査 I 層上面北半（北西から）



(2) 博多遺跡群第 94 次調査 I 層上面全景（北西から）



(1) S X 134 土壙墓（南西から）
(2) S X 136 土壙墓（南東から）



(3) S X 135 土壙墓（南西から） (4) S X 56 土壙墓（南東から）



(5) S X 88 壺棺墓（北東から）

図版 4



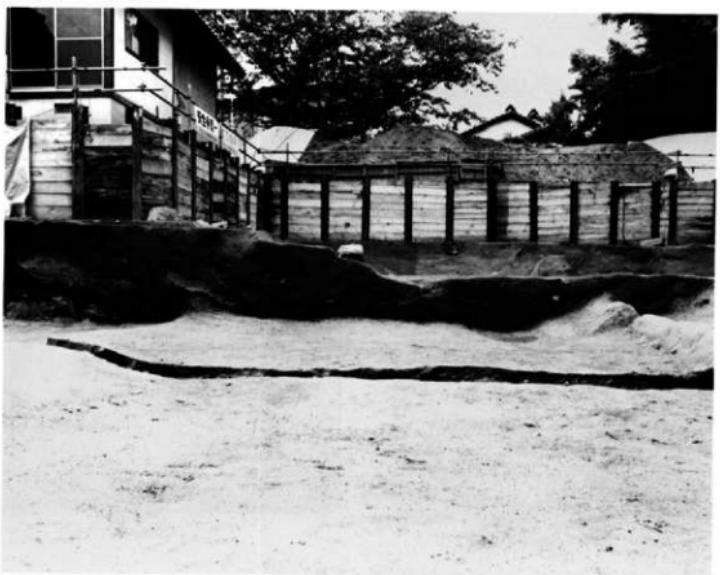
(1) S D 100~104 溝（南東から）



(2) S D 100~104 溝（北西から）



(1) S D 100~103 溝北西壁面土層（南東から）



(2) S D 100~104 溝中央畦土層（南東から）



(2) S D 100~104 溝土層 (南東から)



(4) S D 100~104 溝土層 (北から)



(1) S D 103・104 溝土層 (南東から)



(3) S D 100~104 溝土層 (東から)



(1) S D 100～104・130 湾南東壁面土層②（北西から）



(2) S D 100～104・130 湾南東壁面土層①（北西から）



(4) 杖列（南から）



(3) S D 130 湾土層（北西から）



(1) SD 100～104 溝（西から）



(2) SD 130 溝（北西から）



(1) 博多遺跡群第 106 次西側調査区（北西から）



(2) 博多遺跡群第 106 次東側調査区（北西から）



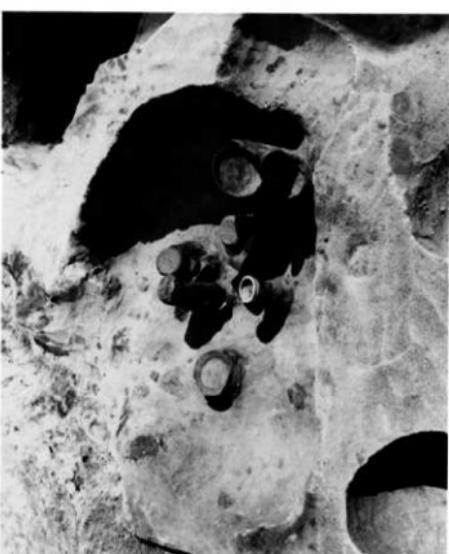
(2) SK 04 土壌 (北西から)



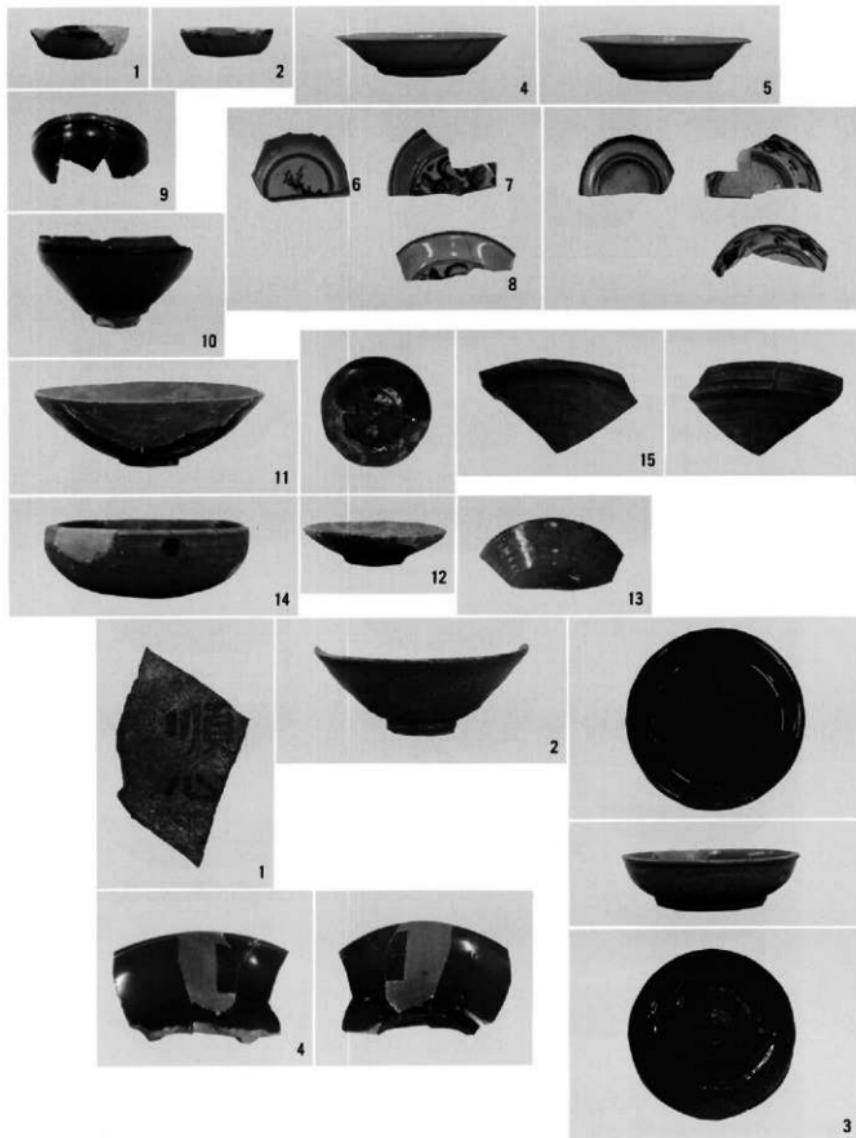
(4) SE 09 井戸 (北から)



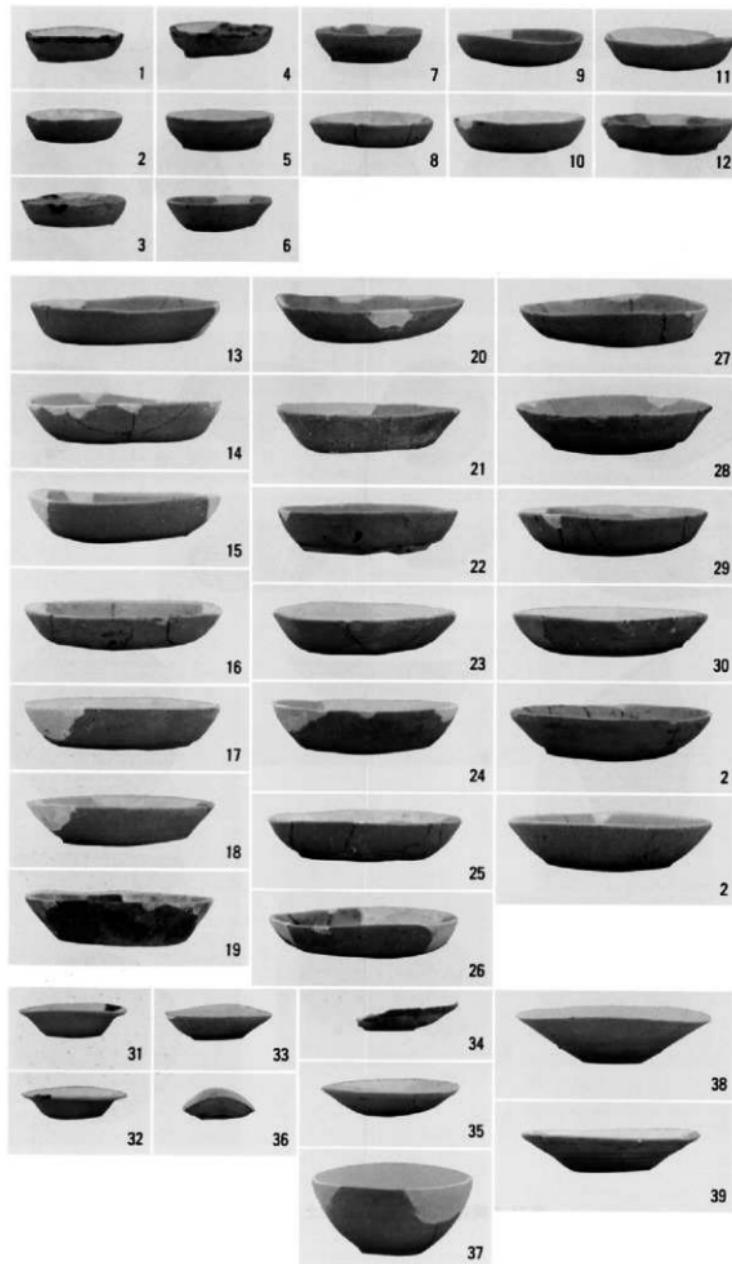
(1) SK 02 土壌 (南から)

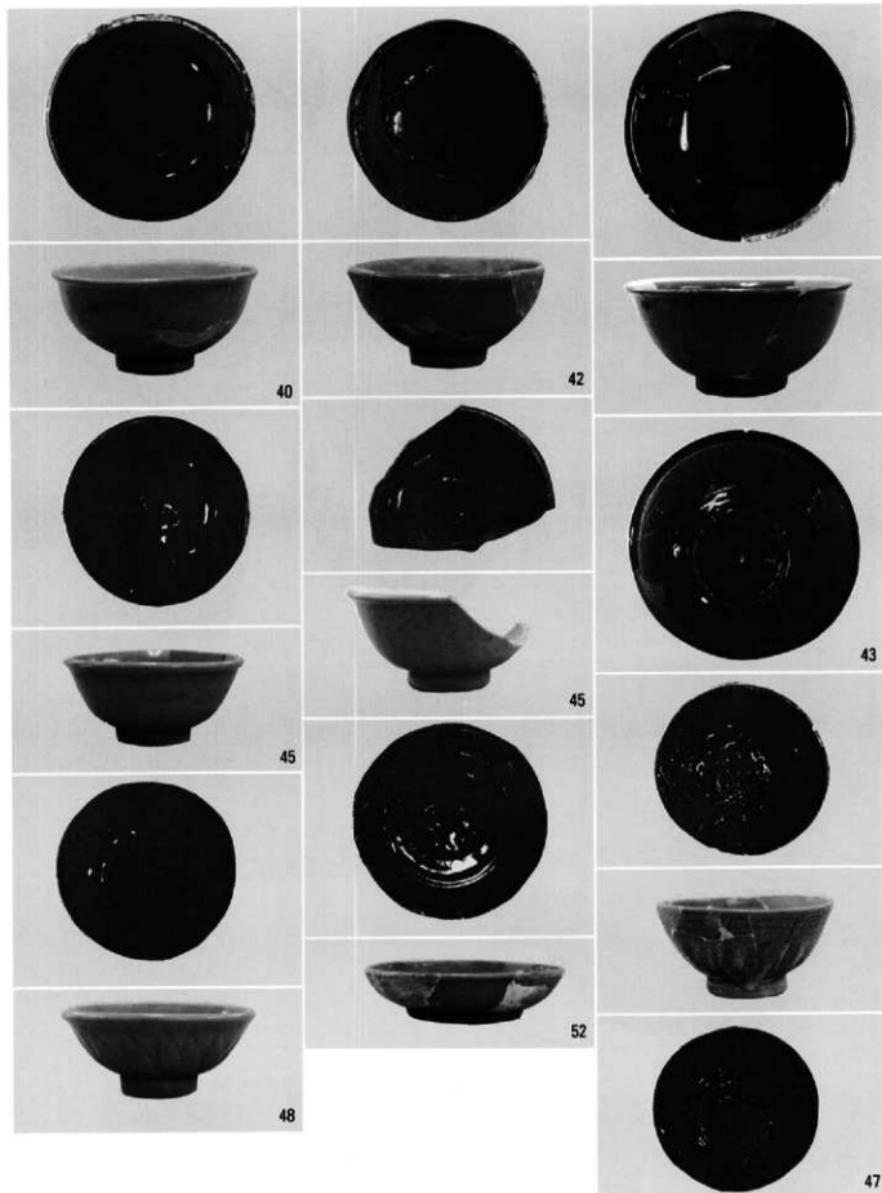


(3) 東側調査区全景 (南西から)

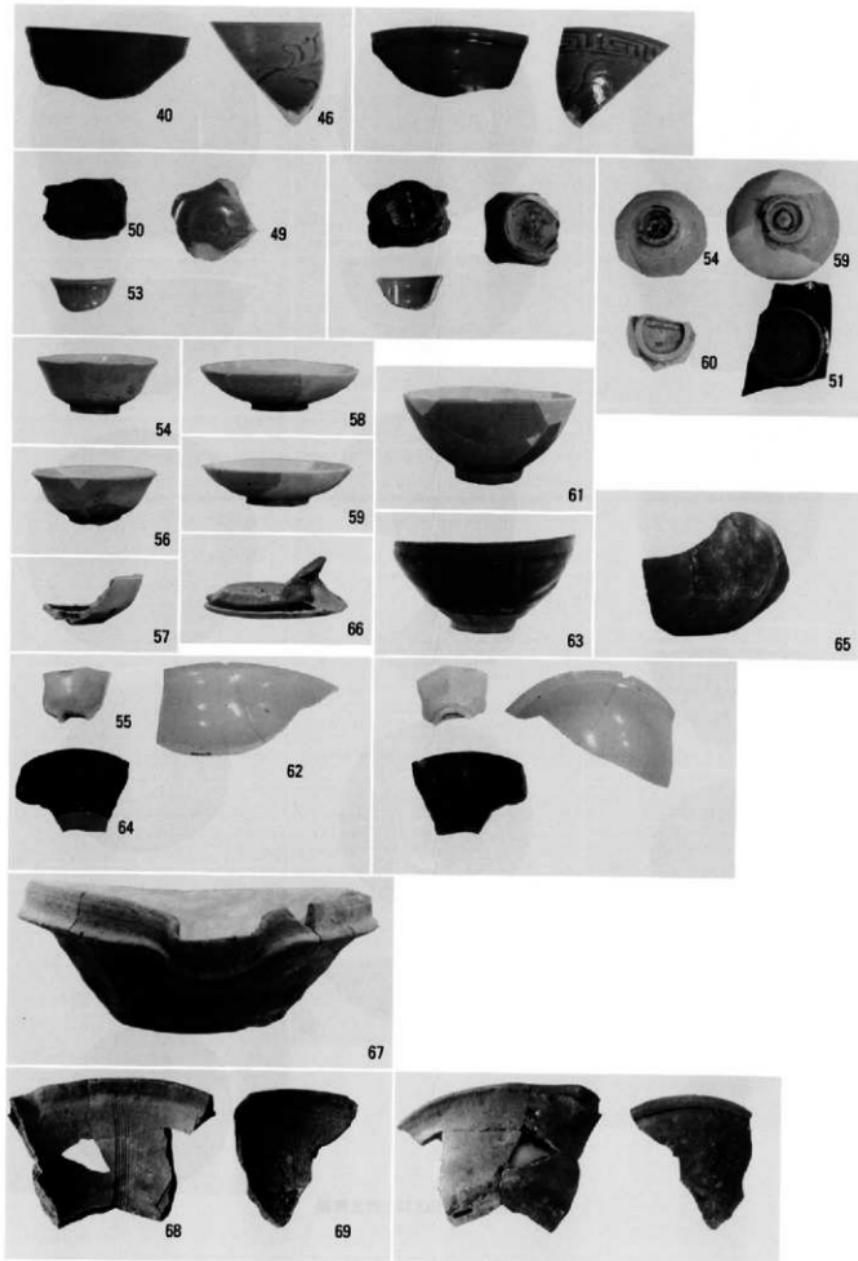


第94次調査 SD 100・101 出土土器・陶磁器

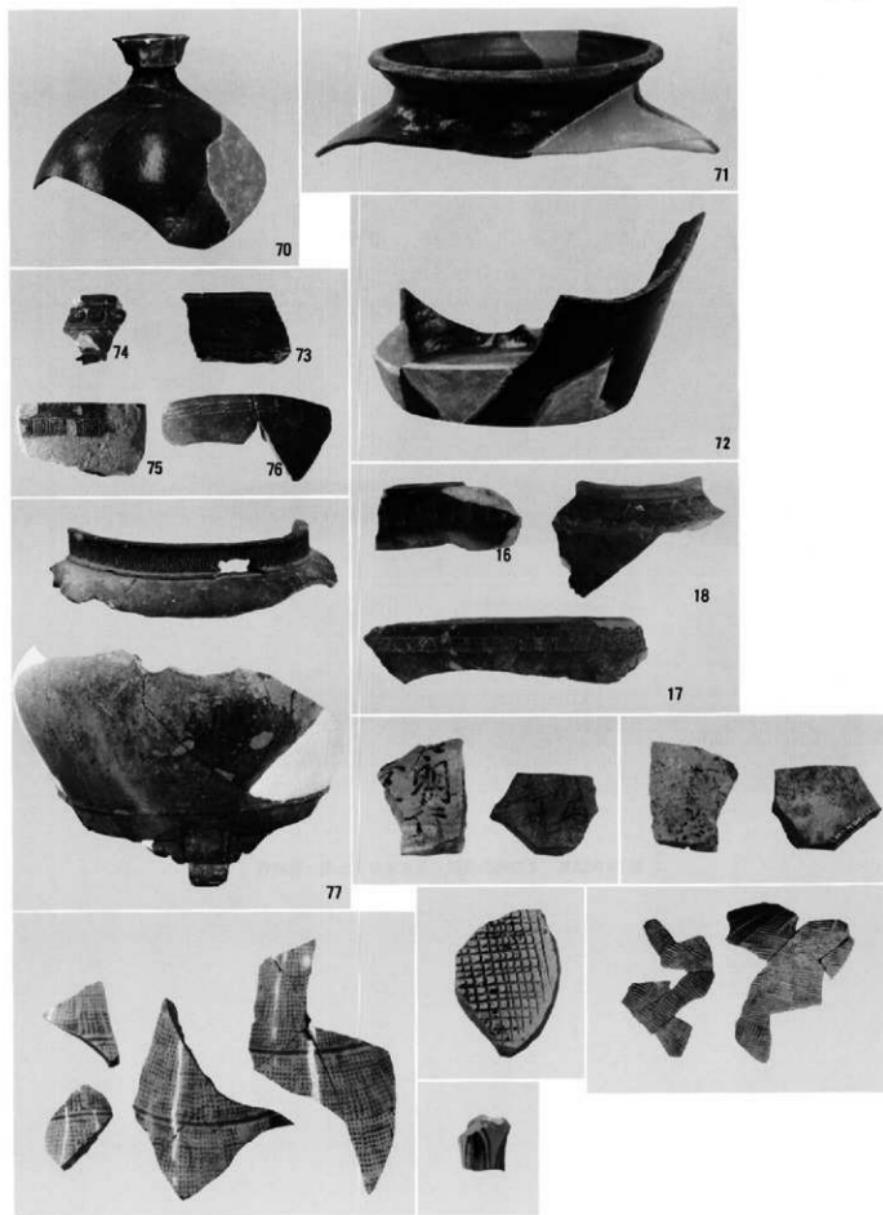




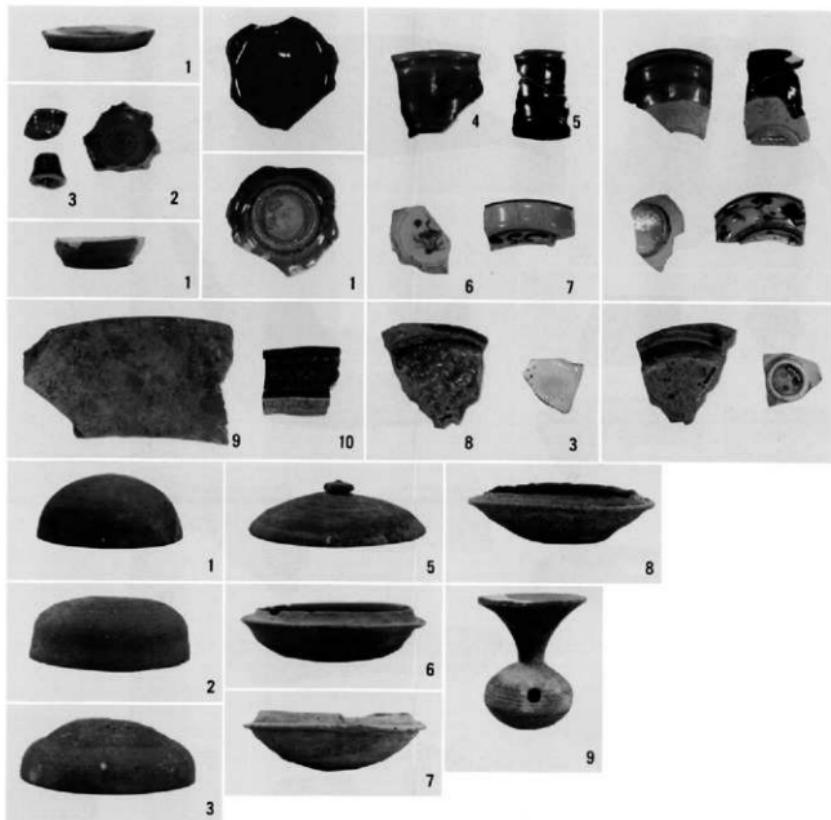
第 94 次調査 SD 102 出土青磁



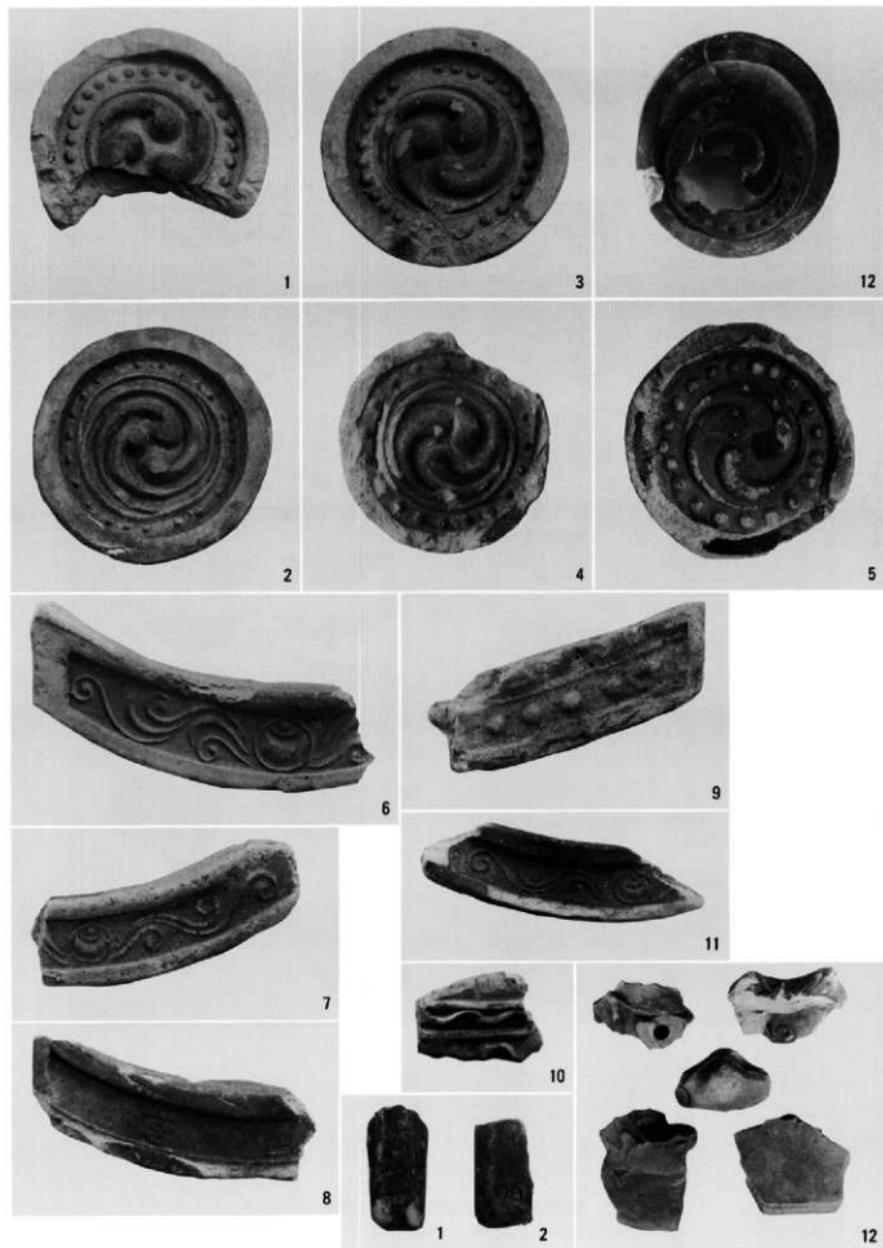
第94次調查 SD 102 出土陶磁器



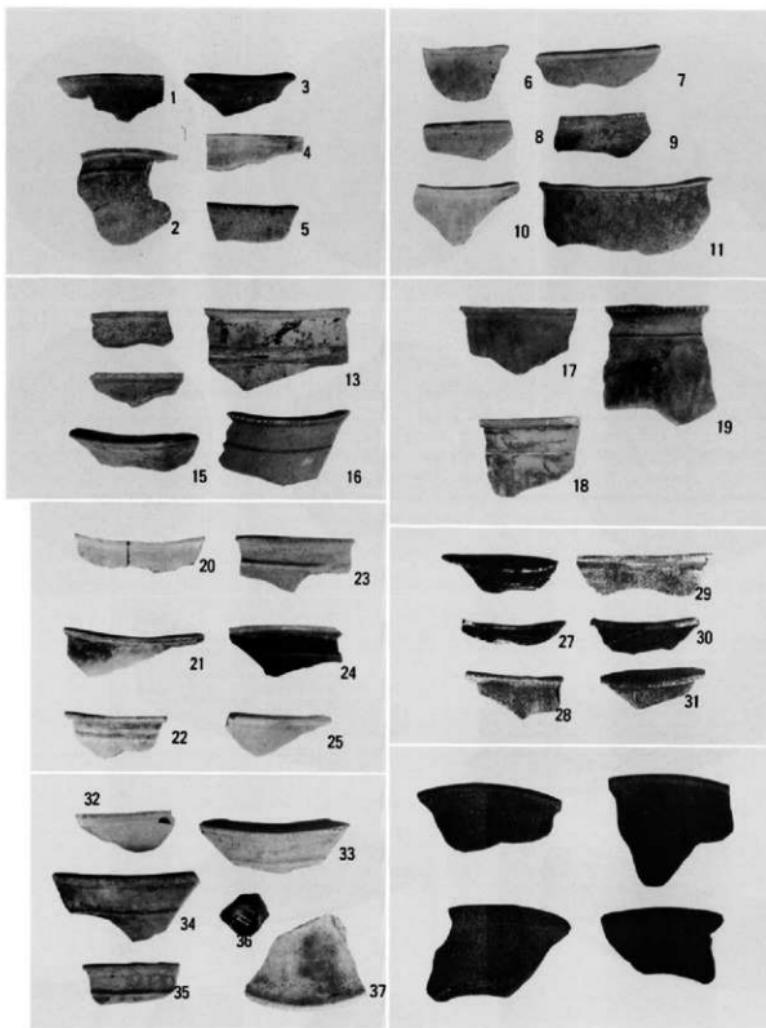
第 94 次調査 SD 102 出土陶器・瓦質土器他

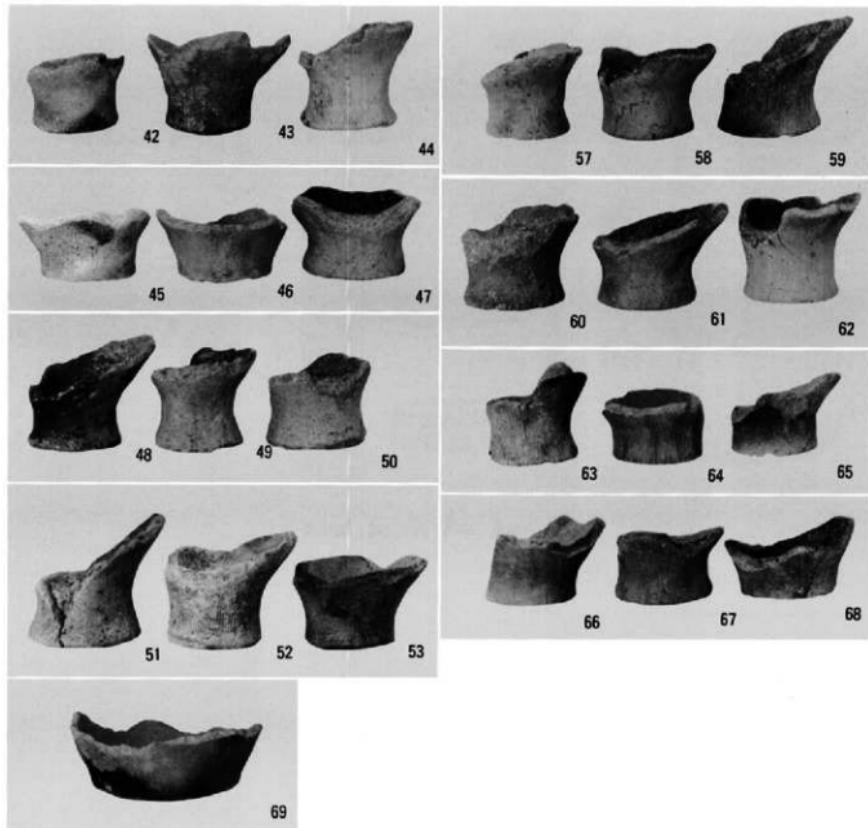


第 94 次調査 その他の遺構・包含層出土土器・陶磁器



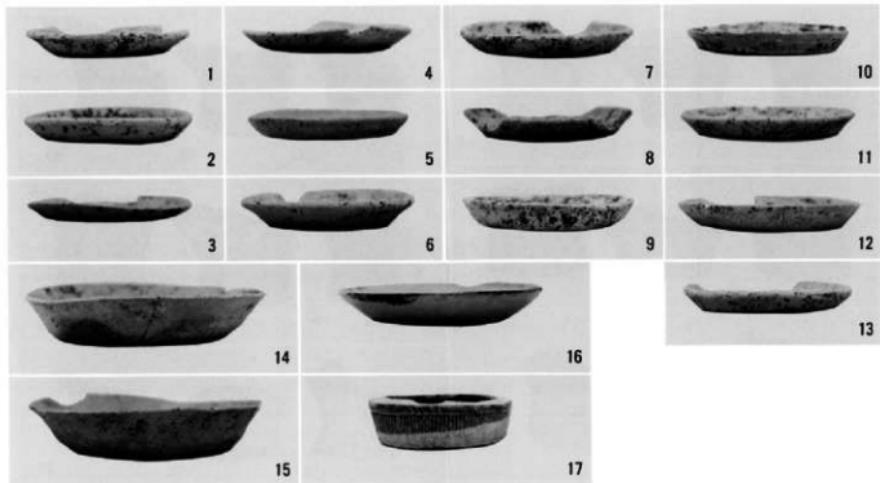
第 94 次調查 出土軒瓦・軒平瓦・烏雲・鬼瓦・土製地藏菩薩像





第 94 次調査 出土弥生土器底部

図版 20



第 106 次調査 SK 02 出土土器・陶磁器

博多 66

—博多遺跡群第94次聖福寺旧塔頭順心庵・第106次発掘調査報告—

1999年（平成11年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 赤坂印刷株式会社

福岡市中央区大手門1丁目8番34号
